

第 11 章 動 物

11-1	工事中		353
11-2	存在時		407

第 11 章 動 物

11-1 工事中

(1) 概 要

水面の埋立てによる陸生動物及び水生動物への影響について検討を行った。

(2) 調 査

既存資料及び現地調査により、現況の把握を行った。

ア 既存資料による調査

(ア) 調査事項

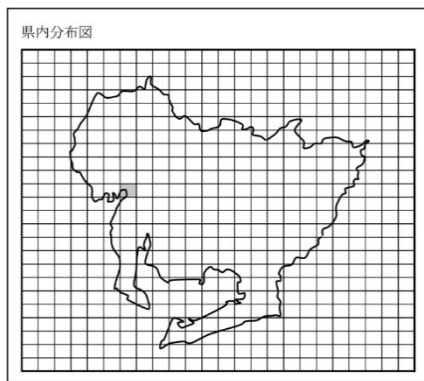
- ・ 陸生動物（哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、陸生貝類、クモ類）
- ・ 水生動物（底生生物、魚介類、付着生物（動物））

(イ) 調査方法

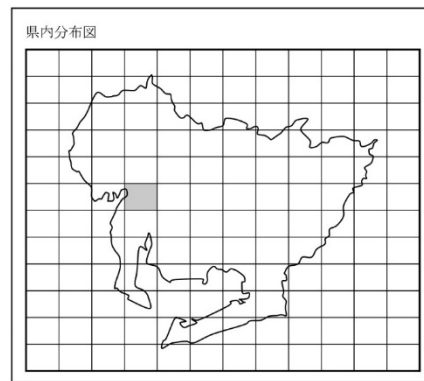
動物の既存資料調査方法は、表 2-11-1 に示す方法により重要な種の生息情報を確認した。

表 2-11-1 重要な種の生息情報の確認方法（動物）

文献	抽出方法
レッドデータブックあいち 2020	「レッドデータブックあいち 2020」において、県内分布が図 2-11-1 の①または②で網掛けしたメッシュに該当する種を抽出した。ただし、市町村単位の分布図で示されている種については、分布域が「名古屋市」とされている種を抽出した。また、分布図が示されていない種については、解説文中のキーワード「大江川」「山崎川」「名古屋港」で検索し抽出した。魚類については、解説文中で「名古屋市」「県内各地」が分布域とされている種も含めた。
名古屋市版レッドリスト 2020	「名古屋市版レッドリスト 2020」において分布域が「港区」または「南区」とされている種を抽出した。ただし、「名古屋市版レッドリスト 2020」において分布図が示されていない種については、「名古屋市版レッドリスト 2015」の分布図を参考に抽出した。



レッドデータブックあいち 2020①



レッドデータブックあいち 2020②



名古屋市版レッドリスト 2020, 2015

図 2-11-1 重要な種を抽出したメッシュ（動物）

(ウ) 調査結果

「名古屋市版レッドリスト 2020」または「レッドデータブックあいち 2020」のいずれかにおいて、調査地域及びその周辺で生息情報のある重要な種は、表 2-11-2、表 2-11-3 に示すとおりである。

表 2-11-2 重要な種の項目別種数

項目		確認数
陸生動物	哺乳類	3 目 4 科 5 種
	鳥類	9 目 17 科 43 種
	爬虫類	2 目 3 科 3 種
	両生類	2 目 2 科 2 種
	昆虫類	4 目 23 科 54 種
	陸生貝類	確認なし
	クモ類	1 目 4 科 5 種
水生動物	底生生物	11 目 39 科 69 種
	魚介類	7 目 15 科 25 種
	付着生物（動物）	確認なし

表 2-11-3(1) 事業予定地及びその周辺における重要な種（哺乳類）

No.	目名	科名	種名	名古屋市 RL2020	愛知県 RDB2020	環境省 RL2020
1	ネズミ（齧歯）	リス	ニホンリス	CR	NT	
2		ネズミ	アカネズミ	VU		
3			カヤネズミ	EN	VU	
4	ネコ（食肉）	イヌ	タヌキ	NT		
5	クジラ（鯨）	ネズミイルカ	スナメリ	CR	NT	
計	3目	4科	5種	5種	3種	0種

（表 2-11-3(1)～(8)共通）

注)1:本表は、調査地域及びその周辺の分布が「名古屋市版レッドリスト 2020」または「レッドデータブックあいち 2020」のいずれかで報告されている種を抽出したものである。「名古屋市版レッドリスト 2020」または「レッドデータブックあいち 2020」の一方のみの分布情報であっても、レッドリストのカテゴリー区分は、両者及び環境省のものを表示した。

2:目・科・和名及び記載順は、「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（2020年11月）」の表記によった。ただし、「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（2020年11月）」に記載がない種の日・科・和名については、「レッドデータブックあいち 2020（2020年3月）」または「名古屋市版レッドリスト 2020」の表記によった。

3:重要な種の区分は、以下のとおりである。

- ・ EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR+EN:絶滅危惧Ⅰ類 CR:絶滅危惧ⅡA類 EN:絶滅危惧ⅡB類 VU:絶滅危惧ⅡC類 NT:準絶滅危惧 DD:情報不足 LP:絶滅のおそれのある地域個体群
- ・ 国リスト(愛知県 2020):環境省レッドリストに掲載されているが、愛知県において重要種の要件に該当しない種
- ・ 国リスト、県リスト(名古屋市 2020):環境省レッドリスト(2020)または愛知県レッドリスト(2020)に記載されているが、名古屋市において重要種の要件に該当しない種

出典:「レッドデータブックあいち 2020」(愛知県, 令和2年3月)

「名古屋市版レッドリスト 2020」(名古屋市, 令和2年3月)

「名古屋市版レッドリスト 2015」(名古屋市, 平成27年3月)

「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(国土交通省, 令和2年11月)

表 2-11-3(2) 事業予定地及びその周辺における重要な種（鳥類）

No.	目名	科名	種名	名古屋市 RL2020	愛知県 RDB2020	環境省 RL2020
1	カモ	カモ	トモエガモ	VU	越冬 VU	VU
2	カイツブリ	カイツブリ	アカエリカイツブリ		越冬 EN	
3	ペリカン	サギ	ヨシゴイ	EN	繁殖 CR 通過 CR	NT
4			ミゾゴイ	EN	繁殖 EN 通過 VU	VU
5			チュウサギ	NT	繁殖 国リスト 通過 国リスト	NT
6		トキ	クロツラヘラサギ	CR	越冬 VU	EN
7	ツル	クイナ	クイナ	NT	越冬 NT	
8			ヒクイナ	VU	繁殖 NT 通過 NT	NT
9	カッコウ	カッコウ	カッコウ	NT	繁殖 VU 通過 NT	
10	チドリ	チドリ	イカルチドリ	NT	繁殖 VU 越冬 NT	
11			シロチドリ	NT	繁殖 VU 越冬 VU	VU
12			メダイチドリ	NT		
13		セイタカシギ	セイタカシギ	NT	繁殖 EN 越冬 VU	VU
14		シギ	ヤマシギ	NT	越冬 NT	
15			オオジシギ	EN	繁殖 CR 通過 VU	NT
16			シベリアオオハシシギ	DD	通過 CR	DD
17			オグロシギ	VU	通過 EN	
18			オオソリハシシギ	NT	通過 EN	VU
19			ダイシャクシギ	NT	越冬 VU	
20			ホウロクシギ	VU	通過 EN	VU
21			ツルシギ	EN	通過 EN	VU
22			アカアシシギ	NT	通過 VU	VU
23			カラフトアオアシシギ		通過 CR	CR
24			タカブシギ	VU	通過 EN	VU
25			オバシギ	NT	通過 VU	
26			コオバシギ	NT	通過 VU	
27			ウズラシギ	VU	通過 EN	
28			ハマシギ	NT	越冬 VU	NT
29			エリマキシギ	NT	通過 VU	
30		タマシギ	タマシギ	EN	繁殖 EN 越冬 EN	VU
31		カモメ	ズグロカモメ	VU	越冬 VU	VU
32			コアシサシ	VU	繁殖 EN 通過 VU	VU
33	タカ	ミサゴ	ミサゴ	NT	繁殖 NT 越冬 リスト外	NT
34		タカ	ハチクマ	VU	繁殖 VU 通過 NT	NT
35			チュウヒ	VU	繁殖 CR 越冬 VU	EN
36			ツミ	NT	繁殖 NT 通過 リスト外	
37			ハイタカ	NT	越冬 国リスト	NT
38			オオタカ	NT	繁殖 NT 越冬 NT	NT
39			サシバ	VU	繁殖 EN 通過 NT	VU
40	ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ	VU	繁殖 VU 越冬 NT	VU
41	スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ	NT	繁殖 国リスト 通過 国リスト	VU
42		ツバメ	コシアカツバメ	VU		
43		アトリ	コイカル	VU		
計	9目	17科	43種	41種	37種	28種

表 2-11-3(3) 事業予定地及びその周辺における重要な種（爬虫類）

No.	目名	科名	種名	名古屋市 RL2020	愛知県 RDB2020	環境省 RL2020
1	カメ	イシガメ	クサガメ	DD		
2		スッポン	ニホンスッポン	DD	DD	DD
3	有鱗	ナミヘビ	シロマダラ	EN	DD	
計	2目	3科	3種	3種	2種	1種

表 2-11-3(4) 事業予定地及びその周辺における重要な種（両生類）

No.	目名	科名	種名	名古屋市 RL2020	愛知県 RDB2020	環境省 RL2020
1	有尾	サンショウウオ	ヤマトサンショウウオ	CR	EN	VU
2	無尾	アカガエル	ナゴヤダルマガエル	CR	VU	EN
計	2目	2科	2種	2種	2種	2種

表 2-11-3(5) 事業予定地及びその周辺における重要な種（昆虫類）

No.	目名	科名	種名	名古屋市 RL2020	愛知県 RDB2020	環境省 RL2020
1	トンボ（蜻蛉）	アオイトトンボ イトトンボ	コバネアオイトトンボ	EX	CR	EN
2			ベニイトトンボ	VU	VU	NT
3			ヒヌマイイトトンボ	EX	EN	EN
4			モートンイトトンボ	NT	NT	NT
5			セスジイトトンボ	NT		
6			ムスジイトトンボ	NT		
7			オオイトトンボ	CR	EN	
8		モノサシトンボ	グンバイトンボ	EX	EN	NT
9		ヤンマ	ネアカヨシヤンマ	VU	NT	NT
10			アオヤンマ	CR	EN	NT
11			マルタンヤンマ	NT		
12		サナエトンボ	キイロサナエ	CR	NT	NT
13			ナゴヤサナエ	NT	NT	VU
14			メガネサナエ	CR	EN	VU
15			フタスジサナエ	EN	VU	NT
16			オグマサナエ	EN	VU	NT
17		エゾトンボ	トラフトンボ	NT	NT	
18			キイロヤマトンボ	EX	NT	NT
19			ハネビロエゾトンボ	CR	VU	VU
20			エゾトンボ	CR	VU	
21		トンボ	ベッコウトンボ	EX	CR	CR
22			キトンボ	EN	EN	
23			ナツアカネ	NT		
24			ノシメトンボ	県リスト	NT	
25			マイコアカネ	NT		
26			マダラナニワトンボ	EX	CR	EN
27			オオキトンボ	EX	CR	EN
28	カメムシ（半翅）	コオイムシ	コガメ	EX	EN	VU
29		タイコウチ	ヒメタイコウチ	VU	NT	
30		コバンムシ	コバンムシ	CR	CR	EN
31	チョウ（鱗翅）	ボクトウガ	ハイイロボクトウ	NT	国リスト	NT
32		タテハチョウ	オオウラギンスジヒョウモン	NT	NT	
33		アゲハチョウ	ジャコウアゲハ本土亜種	NT		
34			ギフチョウ	EX	VU	VU
35		ツトガ	エンスイミズメイガ	EN	DD	
36			マエジロツトガ	EN		
37		ヒトリガ	ヤネホソバ	NT		NT
38		ヤガ	ヌマベウスキョトウ	VU		VU
39	コウチュウ（鞘翅）	オサムシ	エチゴトックリゴミムシ	EX		NT
40		ゲンゴロウ	クロゲンゴロウ	CR	VU	NT
41			ゲンゴロウ	EX	EN	VU
42			コガタノゲンゴロウ	EX	EX	VU
43			マルガタゲンゴロウ	EX	EX	VU
44			シマゲンゴロウ	CR	NT	NT
45			スジゲンゴロウ	EX	EX	EX
46			キベリクロヒメゲンゴロウ	NT		NT
47			コウベツゲンゴロウ	NT		NT
48			ルイスツゲンゴロウ	CR		VU
49		コガシラミズムシ	マダラコガシラミズムシ	NT	NT	VU
50		コツブゲンゴロウ	ムツボシツヤコツブゲンゴロウ	CR	NT	VU
51		ガムシ	マルヒラタガムシ	NT		NT
52			コガムシ	DD		DD
53		クワガタムシ	ヒラタクワガタ本土亜種	NT		
54		ツチハンミョウ	マメハンミョウ	CR		
計	4目	23科	54種	53種	36種	37種

表 2-11-3(6) 事業予定地及びその周辺における重要種（クモ類）

No.	目名	科名	種名	名古屋市 RL2020	愛知県 RDB2020	環境省 RL2020
1	クモ	ジグモ	ワスレナグモ	CR	VU	NT
2			カネコトタテグモ	CR	VU	NT
3		コガネグモ	キシノウエトタテグモ	CR	VU	NT
4			コガネグモ	NT	NT	
5			カコウコモリグモ	CR	VU	
計	1目	4科	5種	5種	5種	3種

表 2-11-3(7) 事業予定地及びその周辺における重要な種（底生生物）

No.	目名	科名	種名	名古屋市 RL2020	愛知県 RDB2020	環境省 RL2020
1	古腹足	ニシキウスガイ	イボキサゴ	CR	EN	NT
2	アマオブネガイ	アマオブネガイ	ヒロクチカノコガイ	VU	VU	NT
3	新生腹足	ウミニナ	ウミニナ	CR	NT	NT
4			イボウミニナ	CR	CR	VU
5		キバウミニナ	フトヘナタリガイ	VU	NT	NT
6			ヘナタリガイ	CR	NT	NT
7			カワアイガイ	CR	CR	VU
8		ワカウラツボ	カワグチツボ	NT	NT	NT
9			サザナミツボ	CR	EN	NT
10			ワカウラツボ	VU	VU	VU
11		カワザンショウガイ	クリイロカワザンショウガイ	NT	NT	NT
12			ツブカワザンショウガイ	NT	NT	NT
13			ヒナタムシヤドリカワザンショウガイ	NT	NT	NT
14			ヨシダカワザンショウガイ	CR	VU	NT
15		ミズゴマツボ	エドガワミズゴマツボ	NT	NT	NT
16		シロネズミガイ	ヒナツボ	DD	DD	
17		イトカケガイ	クリンイトカケ		NT	
18			クレハガイ	NT	NT	NT
19			セキモリガイ	NT	NT	NT
20		フトコロガイ	スミスシラゲガイ		VU	
21		ムシロガイ	ムシロガイ	VU	NT	NT
22		アッキガイ	ツノオリイレ		CR	
23		コロモガイ	オリイレボラ	EN	EN	VU
24		タケノコガイ	イボヒメトクサ		CR	
25	低位異鰓	タクミニナ	タクミニナ	CR	CR	
26	汎有肺	トウガタガイ	カキウラクチキレモドキ	NT	NT	
27			ヌカルミクチキレガイ	VU	VU	NT
28		イソチドリ	イソチドリ	CR	CR	CR+EN
29		オカミミガイ	ナラビオカミミガイ	CR	CR	VU
30			オカミミガイ	CR	EN	VU
31			クリイロコミミガイ	CR	CR	VU
32			キヌカツギハマシイノミガイ	CR	CR	VU
33		ヒラマキガイ	ヒラマキミズマイマイ	NT	NT	DD
34	フネガイ	フネガイ	ハイガイ	EX	EX	VU
35		サンカクサルボウ	ヨコヤマミエガイ		CR	
36	イガイ	イガイ	ツヤガラス	VU	VU	
37	ウグイスガイ	イタボガキ	イタボガキ		CR	CR+EN
38		ハボウキガイ	ズベタイラギ		NT	NT
39			タイラギ（リシケタイラギ）	NT	NT	NT
40	マルスダレガイ	ツキガイ	ツキガイモドキ	NT	NT	
41			イセシラガイ	CR	CR	CR+EN
42		フナガタガイ	ウネナシトマヤガイ	NT	国リスト	NT
43		マメシジミ	ウエジマメシジミ	EN		
44		ドブシジミ	ドブシジミ	VU		
45		マルスダレガイ	フスマガイ		EN	
46			オキシジミ	NT		
47			ウラカガミガイ	CR	CR	CR+EN
48			ハマグリ	EN	NT	VU
49			イヨスダレガイ	VU	NT	
50		ハナグモリ	ハナグモリガイ	CR	CR	VU
51		ニッコウガイ	サビシラトリガイ	EN	EN	NT
52			ヒメシラトリガイ	NT		
53			ゴイサギガイ	NT	NT	
54			ユウシオガイ	NT	NT	NT
55			サクラガイ	NT	NT	NT
56			アオサギガイ	CR	CR	
57			イチョウシラトリ	EX	EX	CR+EN
58		シオサザナミ	イソシジミ	NT		
59		マテガイ	マテガイ	NT	NT	
60		ナタマメガイ	アゲマキガイ	EX	EX	CR+EN
61		バカガイ	ヤチヨノハナガイ	CR	CR	CR+EN
62		カワホトトギス	マゴコロガイ	CR	CR	NT
63	異鰓類	オキナガイ	オキナガイ	EN	NT	
64			ソトオリガイ	NT	NT	
65	オオノガイ	オオノガイ	ヒメマスオガイ	CR	VU	VU
66			クシケマスオガイ	CR	VU	NT
67			オオノガイ	NT	NT	NT
68			クシケマスオガイ	CR	VU	NT
69		ニオガイ	ウミタケ	CR	CR	VU
計	11目	39科	69種	61種	63種	47種

表 2-11-3(8) 事業予定地及びその周辺における重要な種（魚介類）

No.	目名	科名	種名	名古屋市 RL2020	愛知県 RDB2020	環境省 RL2020
1	ウナギ	ウナギ	ニホンウナギ	EN	EN	EN
2	コイ	コイ	コイ（野生型）	DD	DD	
3			デメモロコ		CR	VU
4			ドジョウ	VU	VU	NT
5	ナマズ	ナマズ	ナマズ	NT		
6	サケ	アユ	アユ	VU		
7		シラウオ	シラウオ	VU	VU	
8	ダツ	メダカ	ミナミメダカ	VU	VU	VU
9	スズキ	カジカ	ウツセミカジカ（降海回遊型）	EN	VU	EN
10		カワアナゴ	カワアナゴ	VU	NT	
11		ハゼ	トビハゼ	EN	VU	NT
12			マサゴハゼ	EN	VU	VU
13			トウカイヨシノボリ	CR	CR	NT
14			スミウキゴリ	NT		
15			ウキゴリ	NT		
16			エドハゼ	EN	NT	VU
17	エビ	ヘイケガニ	サメハダヘイケガニ	NT		
18		ベンケイガニ	アカテガニ	VU		
19			ウモレベンケイガニ	VU		
20			クシテガニ	VU		
21			ユビアカベンケイガニ	VU		
22		モクズガニ	モクズガニ	NT		
23		コメツキガニ	チゴガニ	NT		
24			コメツキガニ	NT		
25		スナガニ	ハクセンシオマネキ	EN		VU
計	7目	15科	25種	24種	12種	10種

イ 現地調査

(7) 調査事項

- ・ 陸生動物（哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類）
- ・ 水生動物（動物プランクトン、底生生物、魚卵・稚仔魚、魚介類、付着生物（動物）、海棲哺乳類）

(1) 調査方法

a 陸生動物

(a) 哺乳類

- ・ フィールドサイン調査及び目視観察調査

生態的な特性、周辺の地形状況、植生の連続性を踏まえ、調査範囲を任意に踏査し、確認した足跡、糞、食痕等のフィールドサインから種を推察したほか、目視確認した種も記録した。また、コウモリ類の生息状況を把握するため、日没前後からバットディテクター（コウモリ探知機）による調査も実施した。

- ・ トラップ調査

シャーメントラップ（生け捕り罠）を用いて、ネズミ類の捕獲確認を行った。シャーメントラップはピーナッツを餌として、3 地点に各 10 個を設置し、翌朝回収した。

(b) 鳥 類

- ・ 定点観察調査

調査範囲を広域に見通せる場所に定点観察地点（4 地点）を設定し、その場所に一定時間（30 分程度）とどまり、周辺に出現した個体を双眼鏡（倍率：8～10 倍程度）及び望遠鏡（倍率：20～60 倍程度）を用いて確認し、種名と個体数を記録した。

- ・ ラインセンサス調査

調査範囲内の代表的な環境にセンサスルート（1 ルート）を設置し、鳥類の活動が活発な早朝にルートを時速 1.5km/h 程度で歩き、片側 25m 程度の範囲に出現した個体を目視及び鳴き声より確認し、種名と個体数を記録した。

- ・ 任意観察調査

調査範囲を任意に踏査し、目視及び鳴き声より確認した鳥類の種名等を記録した。

(c) 爬虫類及び両生類

- ・ 目視観察調査

調査範囲内を任意に踏査し、捕獲又は目視により卵塊、幼生、幼体、成体、死体等を確認し、種名と個体数を記録した。

(d) 昆虫類

- ・ 採集調査

調査範囲を任意に踏査し、見つけ採り法、スウィーピング法、ビーティング法等さまざまな方法で任意採集した。目視により同定できた種は種名等を記録し、残り

は持ち帰って室内で同定した。

- ・ベイトトラップ調査

地表徘徊性昆虫を対象とし、底に誘引物（糖蜜）を入れた容器を口が地表と同一になるように埋め込み、一晩放置したあと、容器内に誘引された昆虫類を全て採集した。トラップは、3 地点に各 10 個を設置し、翌朝回収した。採集した個体は持ち帰って室内で同定した。

- ・ライトトラップ調査

主に光誘因性の種を対象とし、光源の下に大型ロート部及び昆虫収納用ボックス部からなる捕虫器を設置し、光源めがけて集まった個体の採集を行なった。光源は紫外線灯（ブラックライト蛍光灯）を用い、トラップは樹林内では林床が見渡せる箇所に、草地ではできるだけ開けた空間に設置するようにした。トラップは 3 地点に各 1 台を設置し、翌朝に回収した。捕獲した個体は持ち帰って室内で同定した。

b 水生動物

(a) 動物プランクトン

- ・採取調査

プランクトンネット（北原式定量プランクトンネット）を用いて、海底上約 1m から海面まで鉛直曳きし、採取した生物をホルマリン等で固定した後、実体顕微鏡または生物顕微鏡を用いて種の同定、個体数の計数を実施した。

(b) 底生生物

- ・採取調査

スミスマッキンタイヤ型採泥器を用いて、1 地点あたり 3 回表層泥の採泥を行い、1mm 目のふるいをかけ、ふるい上に残った生物をホルマリンで固定した後、実体顕微鏡を用いて種の同定、個体数の計数、湿重量を測定した。

(c) 魚卵・稚仔魚

- ・採取調査

稚魚ネット（マルチネット）を用いて、調査地点を中心に表層（海面下 0.5m）を水平円周曳きし、採取した生物をホルマリンで固定した後、実体顕微鏡を用いて種の同定、個体数を計数した。

(d) 魚介類

- ・採取調査

投網、タモ網、底引網（ソリネット）を用いて、調査地点周辺の魚介類を捕獲し、採取した生物をホルマリンで固定した後、種の同定、種毎の個体数の計数と体長（最大・最小）を計測した。

(e) 付着生物（動物）

・採取調査（コドラート法）

平均水面において 30cm×30cm のコドラート枠内に存在する生物を剥ぎ取り、採取した生物をホルマリンで固定した後、実体顕微鏡を用いて種の同定、個体数の計数、湿重量を測定した。

・目視観察調査（ベルトトランセクト法）

潮間帯に観察側線を設け、この側線の両側 1mの範囲について、そこに分布する生物群集を 50cm×50cm を 1 区画として、ベルトトランセクト法により付着生物（動物）の出現種類、個体数または被度を記録した。

(f) 海棲哺乳類

「レッドデータブックなごや 2015 動物編」（名古屋市，平成 27 年 4 月）によると、海棲哺乳類のスナメリが名古屋港に生息するとされている。上記調査時にスナメリを確認した場合は、位置及び個体数を記録した。

(㍑) 調査場所

a 陸生動物

(a) 哺乳類、昆虫類

調査場所は、図 2-11-2 に示すとおりであり、大江川緑地及び事業予定地内とした。

トラップ調査地点は、事業予定地内 2 地点 (No. 1、No. 2) 及び大江川緑地 1 地点 (No. 3) の計 3 地点とした。

(b) 鳥 類

調査場所は、図 2-11-3 に示すとおりであり、大江川緑地、事業予定地内、海側及び海域とした。

定点観察調査地点は、事業予定地内 2 地点 (No. 2、No. 3)、大江川緑地 1 地点 (No. 4)、海側及び海域 1 地点 (No. 1) の計 4 地点とした。

ラインセンサス調査ルートは、事業予定地内と大江川緑地を含む 1 ルートとした。

(c) 爬虫類及び両生類

調査場所は、図 2-11-2 に示すとおりであり、大江川緑地及び事業予定地内とした。

b 水生動物

(a) 動物プランクトン、底生生物、魚卵・稚仔魚、魚介類

調査地点は、図 2-11-4 に示すとおりであり、事業予定地内① (No. 1)、事業予定地内② (No. 2)、海側 (No. 3)、海域 (No. 4) で各 1 地点、計 4 地点とした。

(b) 付着生物（動物）

調査地点は、図 2-11-4 に示すとおりであり、事業予定地内① (No. A)、事業予定地内② (No. B)、海側 (No. C)、海域 (No. D) で各 1 地点、計 4 地点とした。



図 2-11-2 哺乳類、爬虫類、両生類、昆虫類調査場所

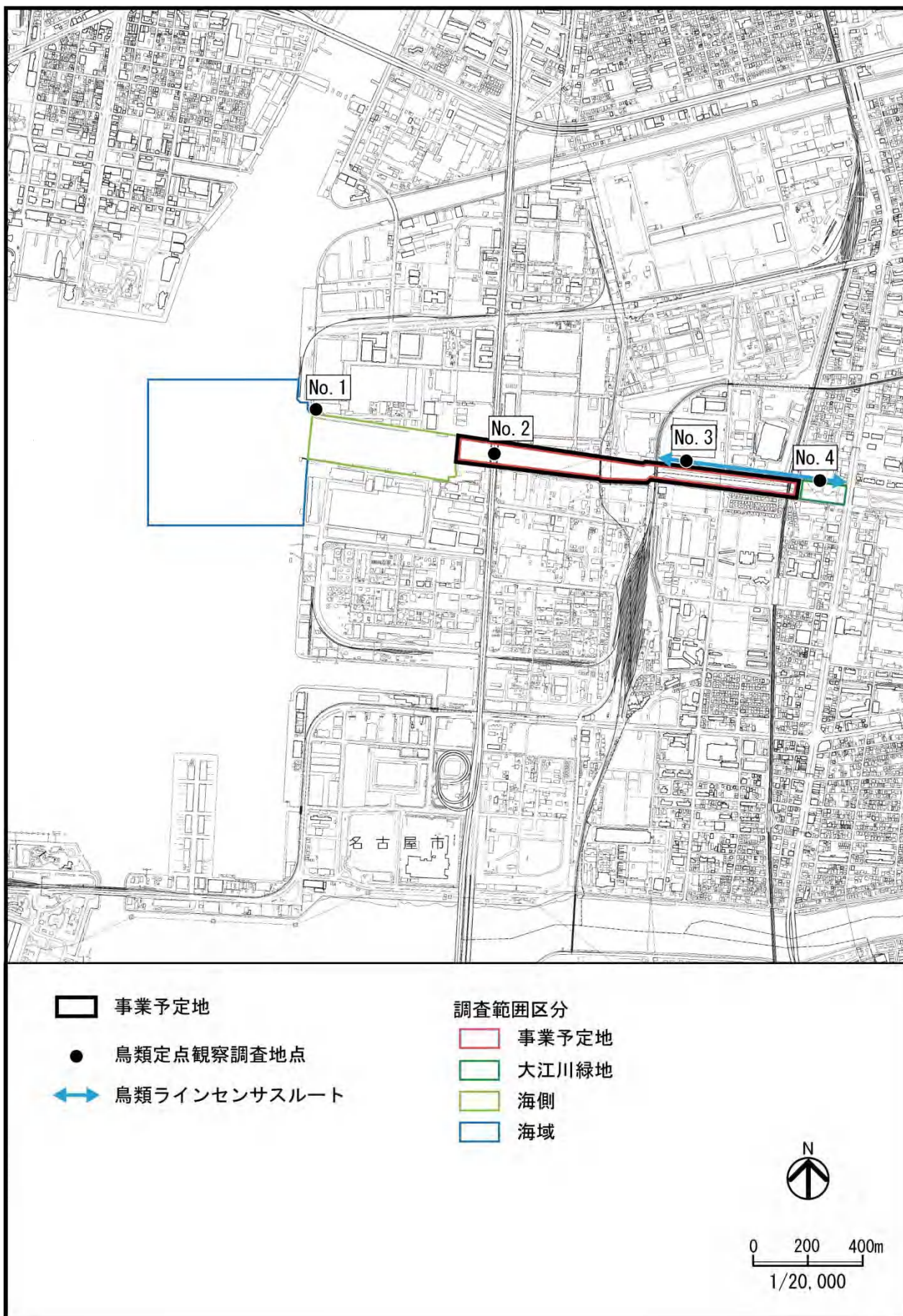


図 2-11-3 鳥類調査場所

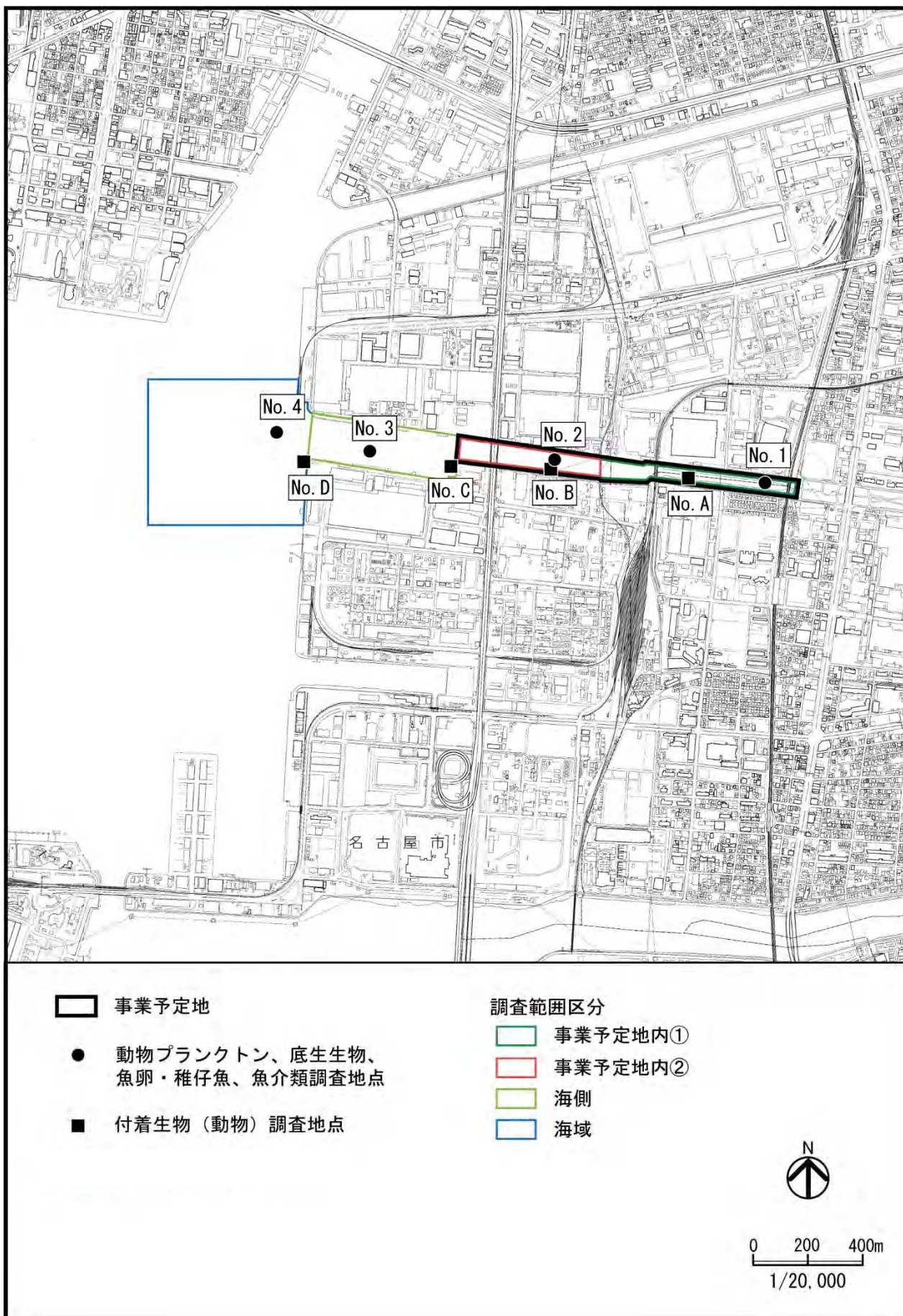


図 2-11-4 水生動物調査場所

(I) 調査期間

調査期間は、表 2-11-4 に示すとおりである。

表 2-11-4(1) 調査期間

調査項目		調査時期	調査日
陸生動物	哺乳類	夏季	令和 2 年 7 月 13 日(月)～14 日(火) 令和 2 年 8 月 6 日(木)～7 日(金)
		秋季	令和 2 年 10 月 1 日(木)～2 日(金)
		春季	令和 3 年 4 月 22 日(木)～23 日(金)
	鳥類	夏季	令和 2 年 7 月 13 日(月)
		秋季	令和 2 年 10 月 2 日(金)
		冬季	令和 3 年 1 月 25 日(月)
		春季	令和 3 年 4 月 26 日(月)
		繁殖期	令和 3 年 5 月 11 日(火)
	爬虫類及び両生類	夏季	令和 2 年 7 月 13 日(月)～14 日(火) 令和 2 年 8 月 6 日(木)～7 日(金)
		秋季	令和 2 年 10 月 1 日(木)～2 日(金)
		春季	令和 3 年 4 月 22 日(木)～23 日(金)
	昆虫類	夏季	令和 2 年 7 月 13 日(月)～14 日(火) 令和 2 年 8 月 6 日(木)～7 日(金)
		秋季	令和 2 年 10 月 1 日(木)～2 日(金)
		春季	令和 3 年 4 月 22 日(木)～23 日(金)

表 2-11-4(2) 調査期間

調査項目		調査時期	調査日
水生動物	動物プランクトン	夏季	令和 2 年 8 月 24 日(月)
		秋季	令和 2 年 10 月 28 日(水)
		冬季	令和 3 年 1 月 25 日(月)
		春季	令和 3 年 4 月 22 日(木)
	底生生物	夏季	令和 2 年 8 月 24 日(月)
		秋季	令和 2 年 10 月 28 日(水)
		冬季	令和 3 年 1 月 25 日(月)
		春季	令和 3 年 4 月 22 日(木)
	魚卵・稚仔魚	夏季	令和 2 年 8 月 24 日(月)
		秋季	令和 2 年 10 月 28 日(水)
		冬季	令和 3 年 1 月 25 日(月)
		春季	令和 3 年 4 月 23 日(金)
	魚介類	夏季	令和 2 年 8 月 24 日(月)～25 日(火)
		秋季	令和 2 年 10 月 27 日(火)～28 日(水)
		冬季	令和 3 年 1 月 25 日(月)～26 日(火)
		春季	令和 3 年 4 月 22 日(木)～23 日(金)
	付着生物（動物）	夏季	令和 2 年 8 月 25 日(火)
		秋季	令和 2 年 10 月 28 日(水)
		冬季	令和 3 年 1 月 26 日(火)
		春季	令和 3 年 4 月 23 日(金)
	海棲哺乳類	夏季	令和 2 年 8 月 24 日(月)～25 日(火)
		秋季	令和 2 年 10 月 27 日(火)～28 日(水)
		冬季	令和 3 年 1 月 25 日(月)～26 日(火)
		春季	令和 3 年 4 月 22 日(木)～23 日(金)

(オ) 調査結果

a 陸生動物

(a) 哺乳類

哺乳類の調査結果は、表 2-11-5 に示すとおりである。

現地調査では、1 種の哺乳類が確認された。

バットディテクター及び目撃によって、事業予定地及び大江川緑地でコウモリ類が確認された。個体の発する超音波の周波数（45kHz 前後）及び市内の分布状況から、アブラコウモリと推定した。

その他の哺乳類は確認されなかった。

表 2-11-5 哺乳類調査結果

No.	目名	科名	種名	事業予定地	大江川緑地
1	コウモリ	ヒナコウモリ	アブラコウモリ ^{注) 2}	夏季 秋季 春季	秋季
計	1 目	1 科	1 種	1 種	1 種

注)1:種の配列及び和名等は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省，令和 2 年）に原則従った。

2:バットディテクター（45kHz）及び目視による確認。市内の分布状況からアブラコウモリと推定された。

(参考文献)

「都市域名古屋には何種類のコウモリが生息しているのか - 音声による種同定の試み - 」

（野呂達哉，第 23 回自然系調査研究機関連絡会議調査研究・活動事例集，P14-P18，令和 2 年 12 月，環境省生物多様性センター(<https://www.biodic.go.jp/relatedinst/23rd/A-01.pdf>)

(b) 鳥 類

鳥類の調査結果は、表 2-11-6 に示すとおりである。

現地調査では、11 目 26 科 60 種の鳥類が確認された。

調査場所は工業地帯の河川河口であり、開放水域や水辺の草地、公園緑地などの環境が存在する。水辺に生息する種としてマガモやカルガモといったカモ類、シギ・チドリ類、カモメ類など、樹林性の種としてコゲラやシジュウカラなどのほか、猛禽類のミサゴやトビなどが確認された。

調査結果の詳細は、資料 1 1 - 1（資料編 p.185）、資料 1 1 - 2（資料編 p.187）及び資料 1 1 - 3（資料編 p.188）に示すとおりである。

表 2-11-6 鳥類調査結果

No.	目名	科名	種名	No.1	No.2	No.3	No.4
				主に 海域	主に 海側	主に 事業予定地	主に 大江川緑地
1	カモ	カモ	オカヨシガモ		○	○	
2			ヒドリガモ		○	○	
3			マガモ		○		
4			カルガモ	○	○	○	
5			ハシビロガモ		○	○	
6			オナガガモ		○	○	
7			コガモ		○	○	
8			ホシハジロ		○	○	
9			キンクロハジロ		○	○	
10			スズガモ	○	○	○	
11			ウミアイサ	○			
12	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ		○		
13			カンムリカイツブリ	○	○	○	
14	ハト	ハト	カワラバト(ドバト)	○		○	
15			キジバト	○	○	○	○
16			アオバト	○	○		
17	カツオドリ	ウ	カワウ	○	○	○	
18	ペリカン	サギ	ササゴイ	○	○	○	
19			アオサギ	○	○	○	
20			ダイサギ	○	○	○	○
21			コサギ			○	
22	ツル	クイナ	オオバン	○	○		
23	チドリ	チドリ	ケリ		○	○	
24			ハジロコチドリ			○	
25			コチドリ		○	○	○
26		シギ	キアシシギ	○	○	○	
27			イソシギ	○	○	○	
28			キョウジョシギ	○	○	○	
29		カモメ	ユリカモメ	○			
30			ウミネコ	○			
31			カモメ	○			
32			セグロカモメ			○	
33			オオセグロカモメ	○			
34			コアシサシ	○			
35	タカ	ミサゴ	ミサゴ		○	○	
36		タカ	トビ	○			
37			ノスリ			○	
38	キツツキ	キツツキ	コゲラ				○
39	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ			○	
40	スズメ	モズ	モズ			○	○
41		カラス	ハシボソガラス	○	○	○	○
42			ハシブトガラス		○	○	○
43		シジュウカラ	シジュウカラ				○
44		ツバメ	ツバメ	○	○	○	○
45		ヒヨドリ	ヒヨドリ	○	○	○	○
46		ムシクイ	エゾムシクイ				○
47		メジロ	メジロ			○	○
48		ムクドリ	ムクドリ		○	○	○
49		ヒタキ	シロハラ				○
50			ツグミ			○	○
51			ジョウビタキ				○
52			イソヒヨドリ	○	○	○	
53			キビタキ				○
54		スズメ	スズメ	○	○	○	○
55		セキレイ	キセキレイ			○	
56			ハクセキレイ	○	○	○	○
57			セグロセキレイ			○	
58		アトリ	カワラヒワ		○		○
59		ホオジロ	アオジ			○	
60			クロジ				○
計	11目26科60種			27種	34種	41種	21種

注) 種の配列及び和名等は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(国土交通省, 令和2年)に原則従った。

(c) 爬虫類

爬虫類の調査結果は、表 2-11-7 に示すとおりである。

現地調査では、2 目 3 科 3 種の爬虫類が確認された。

ミシシippアカミミガメ及びニホンスッポンは事業予定地、ヒガシニホントカゲは大
江川緑地で確認された。

表 2-11-7 爬虫類調査結果

No.	目名	科名	種名	事業予定地	大江川緑地
1	カメ	ヌマガメ	ミシシippアカミミガメ	夏季 1 例 秋季 1 例 春季 1 例	
2		スッポン	ニホンスッポン	秋季 2 例	
3	トカゲ	トカゲ	ヒガシニホントカゲ		秋季 1 例 春季 1 例
計	2 目	3 科	3 種	2 種	1 種

注) 種の配列及び和名等は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(国土交通省, 令和
2 年) に原則従った。

(d) 両生類

現地調査で、両生類は確認されなかった。

(e) 昆虫類

昆虫類の調査結果は、表 2-11-8 に示すとおりである。

現地調査では、14 目 128 科 342 種の昆虫類が確認された。

事業予定地の水辺の草地では 212 種が確認され、アジイトトンボ、アワダチソウグンバイ、イチモンジセセリ、ウスイロコミズギワゴミムシ、アメイロアリなどや、海岸近くに生息するハマベハサミムシ等も見られた。

大江川緑地の樹林環境では 204 種が確認され、アブラゼミ、クロコノマチョウ、アオドウガネ、アメイロアリなどが見られた。

調査結果の詳細は、資料 1 1 - 4 (資料編 p.190)、資料 1 1 - 5 (資料編 p.196) 及び資料 1 1 - 6 (資料編 p.197) に示すとおりである。

表 2-11-8(1) 昆虫類調査結果 (生息環境別)

生息環境	確認種数	主な確認種
水辺環境 (事業予定地)	212 種 夏季：85 種 秋季：88 種 春季：110 種	【トンボ目】 アジイトトンボ等 【カメムシ目】 アワダチソウグンバイ、ヒメナガカメムシ、チャバネアオカメムシ等 【チョウ目】 イチモンジセセリ、コブノメイガ、コベニスジヒメシャク等 【コウチュウ目】 ウスイロコミズギワゴミムシ、セスジヒメテントウ、ヤマトヒメテントウ等 【ハチ目】 アメイロアリ、オオズアリ、アミメアリ、セグロアシナガバチ本土亜種等 【その他】 ハマベハサミムシ等
樹林環境 (大江川緑地)	204 種 夏季：99 種 秋季：60 種 春季：80 種	【カメムシ目】 アブラゼミ、クサギカメムシ、ハネナガマキバサシガメ等 【チョウ目】 クロコノマチョウ、ホソバアツバ等 【コウチュウ目】 アオドウガネ、ビロウドコガネ、ナミテントウ、クロウリハムシ等 【ハチ目】 アメイロアリ、オオズアリ、アカガネコハナバチ等

表 2-11-8(2) 昆虫類調査結果 (季節別)

調査時期	主な確認種
夏季	ツユムシ、ウスイロササキリ、ケラ、カネタタキ、マダラスズ、オンブバッタ、アブラゼミ、ツチカメムシ、マルカメムシ、アメンボ、イチモンジセセリ、ナナホシテントウ、ナミテントウ等
秋季	アジイトトンボ、モリチャバネゴキブリ、ヒゲジロハサミムシ、ツユムシ、ウスイロササキリ、モリオカメコオロギ、カネタタキ、オンブバッタ、ツチカメムシ、クロヤマアリ、アミメアリ等
春季	アオモンイトトンボ、ヒゲジロハサミムシ、ツチカメムシ、ヒメアメンボ、ナミテントウ、コガタルリハムシ、クロヤマアリ、アミメアリ、セイヨウミツバチ等

b 水生動物

(a) 動物プランクトン

動物プランクトンの調査結果は、表 2-11-9 に示すとおりである。

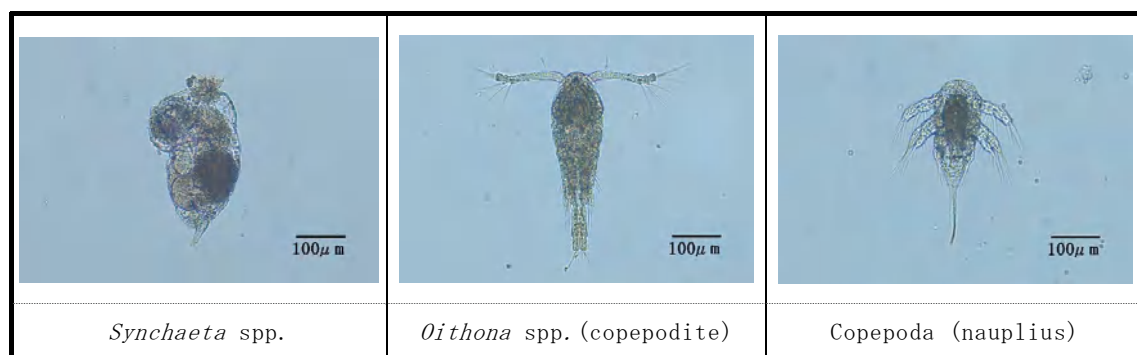
現地調査では、*Synchaeta* spp. (ドロウムシ科)、*Oithona* spp. (copepodite) (オイトナ科)、Copepoda (nauplius) (カイアシ類) など、43 種の動物プランクトンが確認された。

調査地点でみると、No. 1 は四季を通して 20 種、No. 2 は 22 種、No. 3 は 25 種、No. 4 は 33 種が確認され、No. 4 (海域) で種数が多かった。動物プランクトンの個体数は夏季に多くなる傾向があり、個体数の合計は No. 3 が最も多く、No. 2 が最も少なかった。

調査結果の詳細は、資料 1 1 - 7 (資料編 p. 199) に示すとおりである。

表 2-11-9 動物プランクトン調査結果

地点	No. 1 (事業予定地内①・東側)				No. 2 (事業予定地内②・西側)			
時期	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季
個体数 (個体/m ³)	147,370	23,510	14,950	610	53,800	900	9,330	37,800
	186,440				101,830			
種数	10 種	6 種	8 種	13 種	9 種	10 種	9 種	13 種
	20 種				22 種			
主な確認種 (優占種)	<i>Synchaeta</i> spp. Copepoda (nauplius) Bivalvia (umbo larva)				<i>Synchaeta</i> spp. Copepoda (nauplius) Polychaeta (larva)			
地点	No. 3 (海側)				No. 4 (海域)			
時期	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季
個体数 (個体/m ³)	368,010	1,240	61,370	99,790	186,800	1,960	29,250	68,940
	530,410				286,950			
種数	18 種	9 種	10 種	14 種	19 種	10 種	15 種	18 種
	25 種				33 種			
主な確認種 (優占種)	Bivalvia (umbo larva) <i>Oithona</i> spp. (copepodite) <i>Synchaeta</i> spp.				<i>Synchaeta</i> spp. <i>Oithona</i> spp. (copepodite) Copepoda (nauplius)			



(b) 底生生物

底生生物の調査結果は、表 2-11-10 に示すとおりである。

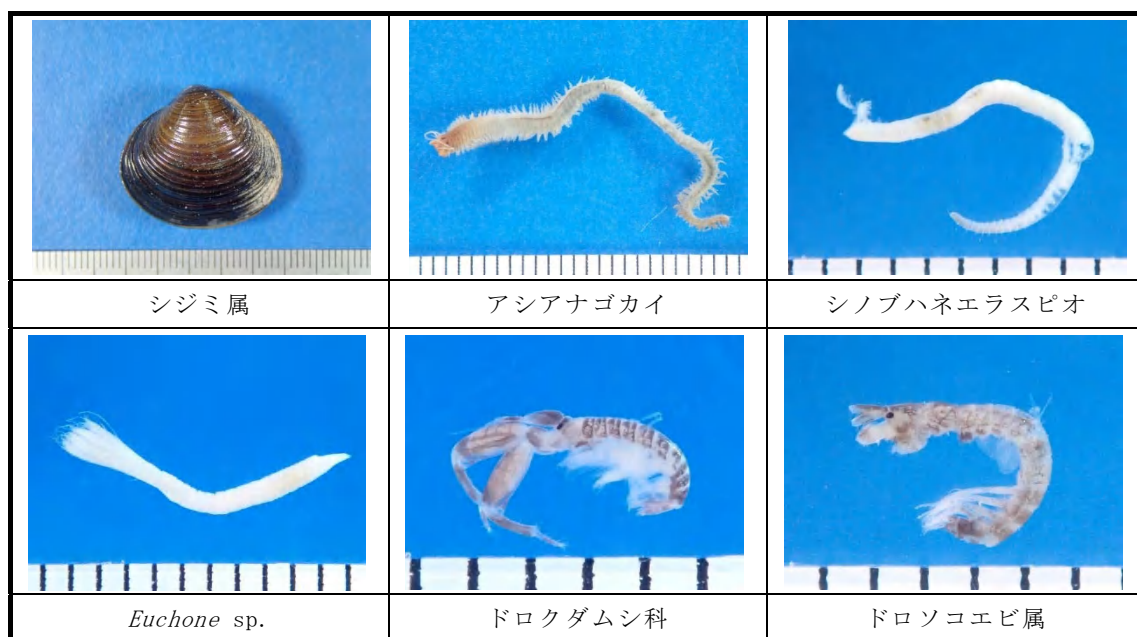
現地調査では、二枚貝のシジミ属や多毛類のアシナゴカイ、シノブハネエラスピオなど 18 科 26 種の底生生物が確認された。

調査地点でみると、No.1 は四季を通して 7 種、No.2 は 16 種、No.3 は 7 種、No.4 は 3 種が確認され、No.2 が多く、No.4 で少なかった。底生生物の個体数は、春季に多くなる傾向があり、個体数の合計は No.1 が最も多く、No.4 が最も少なかった。

調査結果の詳細は、資料 1 1－8（資料編 p.203）に示すとおりである。

表 2-11-10 底生生物調査結果

地点	No.1（事業予定地内①・東側）				No.2（事業予定地内②・西側）			
時期	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季
個体数 (個体/m ³)	360	10	200	4,250	160	94	250	920
	4,820				1,424			
種数	5 種	1 種	3 種	2 種	2 種	5 種	7 種	9 種
	7 種				16 種			
主な確認種 (優占種)	<i>Capitella</i> sp. ドロソコエビ属 シジミ属 ヤマトスピオ				ドロクダムシ科 ドロソコエビ属 アシナゴカイ			
地点	No.3（海側）				No.4（海城）			
時期	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季
個体数 (個体/m ³)	10	0	10	400	0	0	0	60
	420				60			
種数	1 種	0 種	1 種	7 種	0 種	0 種	0 種	3 種
	7 種				3 種			
主な確認種 (優占種)	アシナゴカイ <i>Euchone</i> sp. シノブハネエラスピオ イトエラスピオ				<i>Euchone</i> sp. チヨノハナガイ アシナゴカイ			



(c) 魚卵・稚仔魚

① 魚 卵

魚卵の調査結果は、表 2-11-11 に示すとおりである。

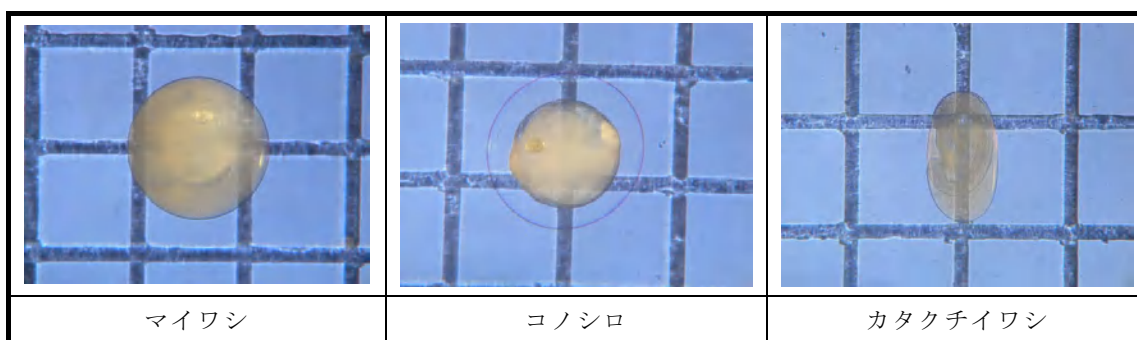
現地調査では、マイワシ、コノシロ、カタクチイワシなど 8 種の魚卵が確認された。

調査地点でみると、No. 1 は四季を通して 1 種、No. 2 は 5 種、No. 3 は 5 種、No. 4 は 7 種が確認され、No. 4（海域）が多く、No. 1（東側）で少なかった。魚卵の個体数の合計は、No. 3 が最も多く、No. 1 及び No. 2 で少なかった。

調査結果の詳細は、資料 1 1－9（資料編 p. 207）に示すとおりである。

表 2-11-11 魚卵・稚仔魚調査結果

地点	No. 1（事業予定地内①・東側）				No. 2（事業予定地内②・西側）			
時期	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季
個体数 (個体/1,000m ³)	0	0	1,635	0	0	0	1,248	368
	1,635				1,616			
種数	0 種	0 種	1 種	0 種	0 種	0 種	1 種	4 種
	1 種				5 種			
主な確認種 (優占種)	単脂球形卵				カタクチイワシ 単脂球形卵			
地点	No. 3（海側）				No. 4（海域）			
時期	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季
個体数 (個体/1,000m ³)	0	0	1,611	22,452	77	0	759	11,731
	24,063				12,567			
種数	0 種	0 種	2 種	3 種	1 種	0 種	2 種	4 種
	5 種				7 種			
主な確認種 (優占種)	マイワシ 単脂球形卵				マイワシ コノシロ カタクチイワシ 単脂球形卵			



② 稚仔魚

稚仔魚の調査結果は、表 2-11-12 に示すとおりである。

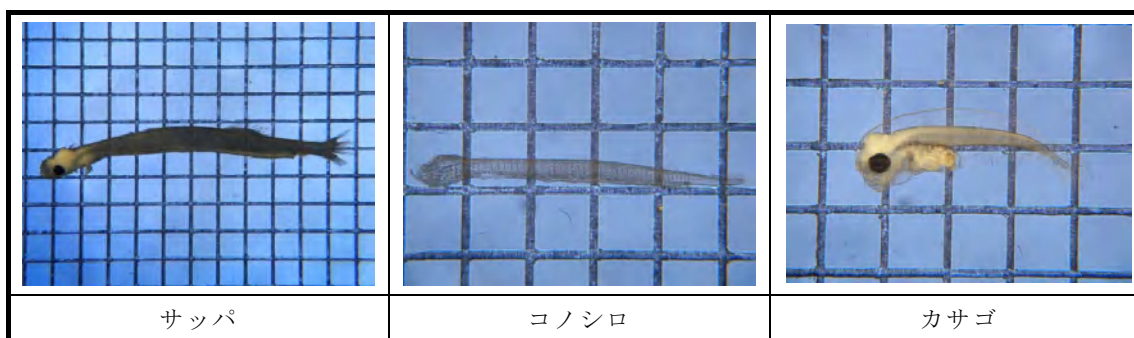
現地調査では、サッパ、コノシロ、カサゴなど 4 科 5 種の稚仔魚が確認された。

調査地点でみると、No.1 は四季を通して 2 種、No.2 は 4 種、No.3 は 5 種、No.4 は 5 種が確認され、No.3（海側）及び No.4（海域）で最も多く、No.1（東側）では少ない傾向が確認された。稚仔魚の個体数の合計も No.4 が最も多く、No.1 が最も少なかった。

調査結果の詳細は、資料 1 1－9（資料編 p.207）に示すとおりである。

表 2-11-12 稚仔魚調査結果

地点	No.1（事業予定地内①・東側）				No.2（事業予定地内②・西側）			
時期	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季
個体数 (個体/1,000m ³)	125	0	0	77	200	0	1,872	0
	202				2,072			
種数	1 種	0 種	0 種	1 種	2 種	0 種	2 種	0 種
	2 種				4 種			
主な確認種	ナベカ属 ハゼ科				カサゴ ハゼ科 ナベカ属 サッパ			
地点	No.3（海側）				No.4（海域）			
時期	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季
個体数 (個体/1,000m ³)	2,879	0	1,036	138	4,533	43	1,043	245
	4,053				5,864			
種数	4 種	0 種	1 種	1 種	2 種	1 種	2 種	3 種
	5 種				5 種			
主な確認種	サッパ カサゴ ナベカ属 コノシロ ハゼ科				サッパ カサゴ ナベカ属 コノシロ ハゼ科			



(d) 魚介類

魚介類の調査結果は、表 2-11-13 に示すとおりである。

現地調査では、遊泳性魚類のボラ、スズキ、サッパや、甲殻類のテナガエビ、シラタエビ、タカノケフサイソガニなど、主に汽水性の魚介類 17 科 32 種が確認された。

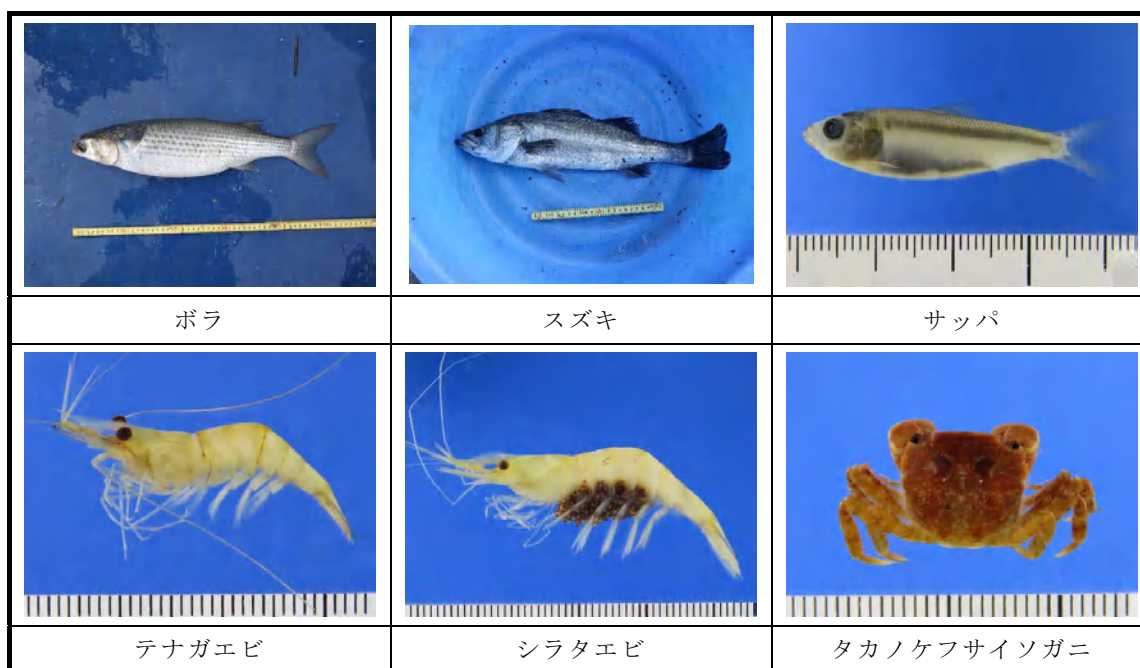
調査地点でみると、No.1 は四季を通して 20 種、No.2 は 21 種、No.3 は 16 種、No.4 は 3 種が確認され、No.2（西側）が最も多く、No.4（海域）が最も少なかった。

調査結果の詳細は、資料 1 1 - 1 0（資料編 p.210）に示すとおりである。

表 2-11-13 魚介類調査結果

地点	No.1（事業予定地内①・東側）				No.2（事業予定地内②・西側）			
時期	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季
個体数	154	28	5	34	19	28	15	121
	221				183			
種数	9 種	10 種	4 種	6 種	9 種	8 種	6 種	6 種
	20 種				21 種			
主な確認種 （優占種）	サッパ ボラ コイ（飼育型）				スズキ ボラ シラタエビ			
地点	No.3（海側）				No.4（海域）			
時期	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季
個体数	27	14	14	60	1	0	3	1
	115				5			
種数	6 種	5 種	4 種	8 種	1 種	0 種	1 種	1 種
	16 種				3 種			
主な確認種 （優占種）	テナガエビ タカノケフサイソガニ スジエビモドキ				ボラ サッパ イシガレイ			

注）No.1、No.2 はタモ網・投網、No.3 はタモ網・投網・ソリネット、No.4 はソリネットによる。



(e) 付着生物（動物）

① コドラート法

コドラート法による付着生物（動物）の調査結果は、表 2-11-14 に示すとおりである。

現地調査では、マガキ、シロスジフジツボ、モクズヨコエビ属など 18 科 27 種の付着生物（動物）が確認された。

調査地点でみると、No. A は四季を通して 10 種、No. B は 14 種、No. C は 21 種、No. D は 12 種が確認され、No. C が最も多く、No. A が最も少なかった。個体数の合計も No. C が最も多く、No. A が最も少なかった。

調査結果の詳細は、資料 1 1 - 1 1（資料編 p. 214）に示すとおりである。

表 2-11-14 付着生物（動物）調査結果

地点	No. A（事業予定地内①・東側）				No. B（事業予定地内②・西側）			
時期	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季
個体数 （個体 /0.09m ² ）	10	29	17	17	1,686	1,201	382	664
	73				3,933			
種数	3 種	6 種	5 種	6 種	11 種	8 種	9 種	6 種
	10 種				14 種			
主な確認種 （優占種）	タテジマフジツボ アメリカフジツボ モクズヨコエビ属				タテジマフジツボ シロスジフジツボ モクズヨコエビ属			
地点	No. C（海側）				No. D（海城）			
時期	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季
個体数 （個体 /0.09m ² ）	2,150	270	880	1,420	248	796	718	668
	4,720				2,430			
種数	9 種	7 種	14 種	13 種	6 種	8 種	10 種	9 種
	21 種				12 種			
主な確認種 （優占種）	コウロエンカワヒバリガイ タテジマフジツボ モクズヨコエビ属				コウロエンカワヒバリガイ タテジマフジツボ マガキ			



② ベルトトランセクト法

ベルトトランセクト法による付着生物（動物）の目視観察調査結果は表 2-11-15 に、確認状況は表 2-11-16 に示すとおりである。

目視観察では、感潮部の上部にはタテジマフジツボやシロスジフジツボなどのフジツボ類、下部にはコウロエンカワヒバリガイ、イガイダマシ属などの二枚貝や、磯巾着目を確認され、各地点で種組成に大きな違いは認められなかった。

調査結果の詳細は、資料 1 1 - 1 2（資料編 p.218）に示すとおりである。

表 2-11-15(1) ベルトトランセクト法調査結果 (No. A)

No.	種名	時期			
		夏季	秋季	冬季	春季
1	タテジマフジツボ	○	○	○	○
2	アメリカフジツボ	○	○	○	○
3	ヨーロッパフジツボ		○		
4	シロスジフジツボ	○	○	○	○
5	タテジマイソギンチャク	○	○	○	○
6	磯巾着目				
7	イボニシ				
8	タマキビ				
9	ミドリイガイ				
10	コウロエンカワヒバリガイ	○	○	○	○
11	マガキ				
12	イガイダマシ属	○	○	○	
13	シロボヤ				

表 2-11-15(2) ベルトトランセクト法調査結果 (No. B)

No.	種名	時期			
		夏季	秋季	冬季	春季
1	タテジマフジツボ	○	○	○	○
2	アメリカフジツボ	○	○	○	○
3	ヨーロッパフジツボ				
4	シロスジフジツボ	○	○	○	○
5	タテジマイソギンチャク				
6	磯巾着目				
7	イボニシ				
8	タマキビ				
9	ミドリイガイ				
10	コウロエンカワヒバリガイ	○	○	○	○
11	マガキ				
12	イガイダマシ属		○	○	○
13	シロボヤ				

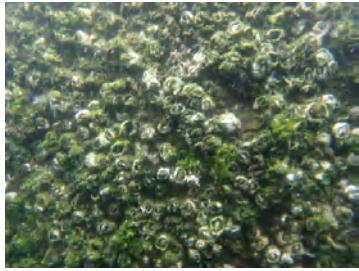
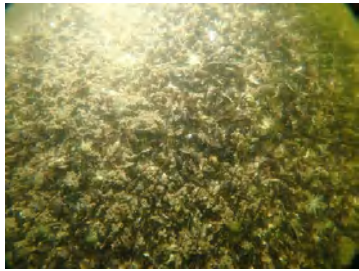
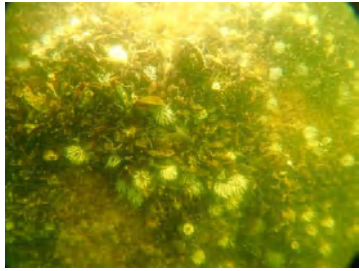
表 2-11-15(3) ベルトトランセクト法調査結果 (No. C)

No.	種名	時期			
		夏季	秋季	冬季	春季
1	タテジマフジツボ	○	○	○	○
2	アメリカフジツボ		○	○	
3	ヨーロッパフジツボ				
4	シロスジフジツボ	○	○	○	○
5	タテジマイソギンチャク		○	○	○
6	磯巾着目	○	○	○	○
7	イボニシ				
8	タマキビ			○	
9	ミドリイガイ	○	○	○	○
10	コウロエンカワヒバリガイ	○	○	○	○
11	マガキ	○	○	○	○
12	イガイダマシ属				
13	シロボヤ				

表 2-11-15(4) ベルトトランセクト法調査結果 (No. D)

No.	種名	時期			
		夏季	秋季	冬季	春季
1	タテジマフジツボ	○	○	○	○
2	アメリカフジツボ				
3	ヨーロッパフジツボ				
4	シロスジフジツボ	○	○	○	○
5	タテジマイソギンチャク	○	○	○	○
6	磯巾着目	○	○	○	○
7	イボニシ	○			
8	タマキビ	○	○	○	○
9	ミドリイガイ	○	○	○	○
10	コウロエンカワヒバリガイ	○	○	○	○
11	マガキ	○	○	○	○
12	イガイダマシ属				
13	シロボヤ				○

表 2-11-16 ベルトトランセクト法の確認状況

		
1 枠	2 枠	3 枠
No. A (事業予定地内①・東側)		
		
1 枠	2 枠	3 枠
No. B (事業予定地内②・西側)		
		
1 枠	2 枠	3 枠
No. C (海側)		
		
1 枠	2 枠	3 枠
No. D (海域)		

(f) 海棲哺乳類

海上での各種調査時に船上から目視観察を行ったが、海棲哺乳類は確認されなかった。

c 重要な種

重要な種の選定基準は、表 2-11-17 に示すとおりである。

表 2-11-17 重要な種の選定基準

No.	略称	重要な種の選定基準と区分
①	天然記念物	「文化財保護法」（昭和25年5月30日法律第214号）に基づく天然記念物及び特別天然記念物 (区分) 特天：特別天然記念物 県：愛知県指定 天：天然記念物 市：名古屋市指定
②	種の保存法	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成4年6月5日法律第75号）に基づく国内希少野生動植物種、国際希少野生動植物種及び緊急指定種 (区分) 国内：国内希少野生動植物種 緊急：緊急指定種 国際：国際希少野生動植物種
③	環境省RL	「環境省レッドリスト2020」（環境省、令和2年3月）の選定種 (区分) EX：絶滅（我が国ではすでに絶滅したと考えられる種。） EW：野生絶滅（飼育・栽培下、あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種。） CR：絶滅危惧IA類（絶滅の危機に瀕している種で、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。） EN：絶滅危惧IB類（絶滅の危機に瀕している種で、IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。） VU：絶滅危惧II類（絶滅の危険が増大している種。） NT：準絶滅危惧（現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種。） DD：情報不足（評価するだけの情報が不足している種。） LP：絶滅のおそれのある地域個体群（地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。）
④	環境省海洋生物RL	「環境省海洋生物レッドリスト2017」（環境省、平成29年3月）の選定種 (区分) EX：絶滅（我が国ではすでに絶滅したと考えられる種。） EW：野生絶滅（飼育・栽培下でのみ存続している種。） CR：絶滅危惧IA類（ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。） EN：絶滅危惧IB類（IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。） VU：絶滅危惧II類（絶滅の危険が増大している種。） NT：準絶滅危惧（現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種。） DD：情報不足（評価するだけの情報が不足している種。） LP：絶滅のおそれのある地域個体群（地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。）
⑤	愛知県RL	「レッドリストあいち2020」（愛知県、令和2年3月）の選定種 (区分) EX・EW：絶滅・野生絶滅（愛知県ではすでに絶滅したと考えられる種。野生では絶滅し、飼育・栽培下でのみ存続している種。） CR：絶滅危惧IA類（絶滅の危機に瀕している種で、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。） EN：絶滅危惧IB類（絶滅の危機に瀕している種で、IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。） VU：絶滅危惧II類（絶滅の危険が増大している種。） NT：準絶滅危惧（存続基盤が脆弱な種。） DD：情報不足（「絶滅」「絶滅危惧」「準絶滅危惧」のいずれかに該当する可能性が高いが、評価するだけの情報が不足している種。） LP：地域個体群（その種の国内における生息状況に鑑み、愛知県において特に保全のための配慮が必要と考えられる特徴的な個体群。）
⑥	愛知県指定種	「自然環境の保全及び緑化の推進に関する条例」（昭和48年3月30日条例第3号）に基づく指定希少野生動植物種の指定種
⑦	名古屋市RL	「名古屋市版レッドリスト2020」（名古屋市、令和2年7月）の選定種 (区分) EX・EW：絶滅・野生絶滅（名古屋市ではすでに絶滅したと考えられる種。野生では絶滅し、栽培下あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種。） CR：絶滅危惧IA類（絶滅の危機に瀕している種で、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。） EN：絶滅危惧IB類（絶滅の危機に瀕している種で、IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。） VU：絶滅危惧II類（絶滅の危険が増大している種。） NT：準絶滅危惧（存続基盤が脆弱な種。） DD：情報不足（評価するだけの情報が不足している種。）

(a) 陸生動物

① 哺乳類

現地調査で、重要な哺乳類は確認されなかった。

② 鳥 類

現地調査で確認された重要な鳥類は表 2-11-18 に、特徴及び現地確認状況は表 2-11-19 に、確認位置は図 2-11-5 に示すとおりである。

鳥類の重要な種は、ケリ、オオセグロカモメ、コアジサシ、ミサゴの4種が確認された。

表 2-11-18 重要な種（鳥類）

No.	目名	科名	種名	海側・ 海域	事業 予定地	大江川 緑地	選定基準						
							①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
1	チドリ	チドリ	ケリ		9 例				DD				
2		カモメ	オオセグロカモメ	3 例					NT				
3			コアジサシ	15 例					VU		繁殖 (EN) 通過 (VU)		VU
4	タカ	ミサゴ	ミサゴ	3 例	1 例				NT		繁殖 (NT)		NT
計	2 目	3 科	4 種	3 種	2 種	0 種	0 種	0 種	4 種	0 種	2 種	0 種	2 種

注)1:種名及び配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(国土交通省, 令和2年)に原則従った。

2:選定基準は、表 2-11-17 に対応する。

表 2-11-19(1) 重要な種の特徴及び現地確認状況

種名	ケリ（チドリ目チドリ科）
選定基準と区分	環境省RL：情報不足
形態	全長約36cm。黄色く長い足が特徴的で、目は赤く、黄色のアイリングがある。飛翔時、背の灰褐色、翼の黒色部と白色部の違いが明瞭で目立つ。嘴は短く先端が黒色で基部は黄色。脚は黄色。  他地区での撮影写真
分布の概要	全国的に観察され、九州以北から本州にかけて繁殖するが局地的。本州北部の個体は夏鳥として渡来する。名古屋市内では、ある程度数が観察され、特に西部に比較的安定した個体群が生息する。
生息地の環境／生態的特性	繁殖期は3～6月。耕作地、休耕地、放棄水田、河川敷、草地を利用して繁殖する。ミミズ、昆虫等を捕食する。
現在の生息状況／減少の要因	繁殖地として耕作地をよく利用するため、耕作方法や耕作時期の変化などにより、繁殖に影響を受けている可能性がある。
現地調査での確認状況	事業予定地で冬季に6例、春季に2例、繁殖期に1例の飛翔が確認された。

出典)「レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 2 鳥類」(環境省, 平成 26 年 9 月)
「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック なごや 2015 動物編」
(名古屋市, 平成 27 年 4 月)

表 2-11-19(2) 重要な種の特徴及び現地確認状況

種名	オオセグロカモメ（チドリ目カモメ科）
選定基準と区分	環境省RL：準絶滅危惧
形態	全長61cm、翼を広げると156cmにもなる大形種。背、翼の上面は黒色で、下面は白色。くちばしは橙黄色で大きく、下くちばしの先の方に赤斑がある。  他地区での撮影写真
分布の概要	北海道、東北、本州北部の沿岸域で繁殖し一年中見られるが、他の地域では冬鳥として海岸に飛来する。北日本に多く、西日本では少ない。
生息地の環境／生態的特性	繁殖期は5～8月。海岸、海上に生息し、海岸の崖、岩礁、ときに建物で繁殖する。 主に魚類、動物の死体を食べる。
現在の生息状況／減少の要因	本種の繁殖地は、北海道全域、東北地方、北陸地方に点在している。1980年代に多数が繁殖していた多くの繁殖地では、繁殖個体数の著しい減少が続いている。 減少要因は明らかでないが、海岸開発、捕獲・狩猟、オジロワシ等による捕食が考えられる。
現地調査での確認状況	海域で冬季に3例の飛翔が確認された。

出典)「環境省レッドリスト 2020 補遺資料」(環境省, 令和 2 年 3 月)
「原色日本野鳥生態図鑑 水鳥編」(保育社, 平成 7 年 3 月)

表 2-11-19(3) 重要な種の特徴及び現地確認状況

種名	コアジサシ（チドリ目カモメ科）
選定基準と区分	環境省RL：絶滅危惧Ⅱ類 愛知県RL：絶滅危惧ⅡB類（繁殖）、絶滅危惧Ⅱ類（通過） 名古屋市RL：絶滅危惧Ⅱ類
形態	全長21～31cm。先の尖った長い翼と深く切れ込んだ尾が特徴。背と翼の上面は淡青灰色で、上尾筒と尾と下面は純白。夏羽では頭上～後頭は黒く、嘴は黄色で先端が黒く、脚は橙黄色。 
分布の概要	本州、四国、九州、南西諸島に夏鳥として渡来し、各地で繁殖する。愛知県内では平野部に広く分布し各地で繁殖する。名古屋市内では海沿いの南部地域のほか、多くの区で記録されている。
生息地の環境／生態的特性	4月中旬～10月上旬、南方から渡来し、海岸や河川、池沼等で小魚を捕食して生活する。5～7月頃、水辺に近い砂礫地で集団繁殖する。犬や人などの外敵が巣に近づくと、集団で威嚇攻撃をする習性がある。飛びながらクリックリッと鳴く。
現在の生息状況／減少の要因	渡来地は名古屋市内に広く分布している。本種の減少は、繁殖地となる砂礫地の縮小・消滅が最大の理由であるが、さらにはカラスによる卵やひなの食害が近年国内各地で深刻化している。
現地調査での確認状況	海域で繁殖期に15例の飛翔や休息が確認された。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」
(名古屋市, 平成 27 年 4 月)

表 2-11-19(4) 重要な種の特徴及び現地確認状況

種名	ミサゴ（タカ目ミサゴ科）
選定基準と区分	環境省RL：準絶滅危惧 愛知県RL：準絶滅危惧（繁殖） 名古屋市RL：準絶滅危惧
形態	全長雄約55cm、雌約64cm。翼は細長く尾は短め。頭は白く、過眼線が黒い。体の上面は黒褐色。下面は白く、胸に黒褐色の帯がある。魚食鳥として進化し、前後に2本ずつ向く脚指を持つ。 
分布の概要	北海道、本州、南千島で夏鳥、本州以南では留鳥。愛知県内では平野部で広く観察されるが、数は多くない。主として冬鳥・旅鳥だが、夏期の記録もある。名古屋市内では近年広く記録されている。
生息地の環境／生態的特性	海岸や湖沼に生息し、岩棚上や大木の梢に（近年は人工的な鉄塔の上でも）営巣する。春・秋の移動期には内陸で見られることもある。水面上で停空飛翔をしてねらいを定め、急降下して中・大型の魚をつかみ取る。
現在の生息状況／減少の要因	名古屋市内では近年熱田区を除く全区で記録があり、その多くは通過個体、港区の庄内川、新川、日光川河口付近には周年生息している。魚を餌とするので、激変する環境への適応性は高くないと思われる。現在の主生息地である庄内川河口部一帯の餌場としての保全が必要である。
現地調査での確認状況	事業予定地で冬季に1例の飛翔、海側で秋季に2例のとまり、冬季に1例の採餌が確認された。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」
(名古屋市, 平成 27 年 4 月)

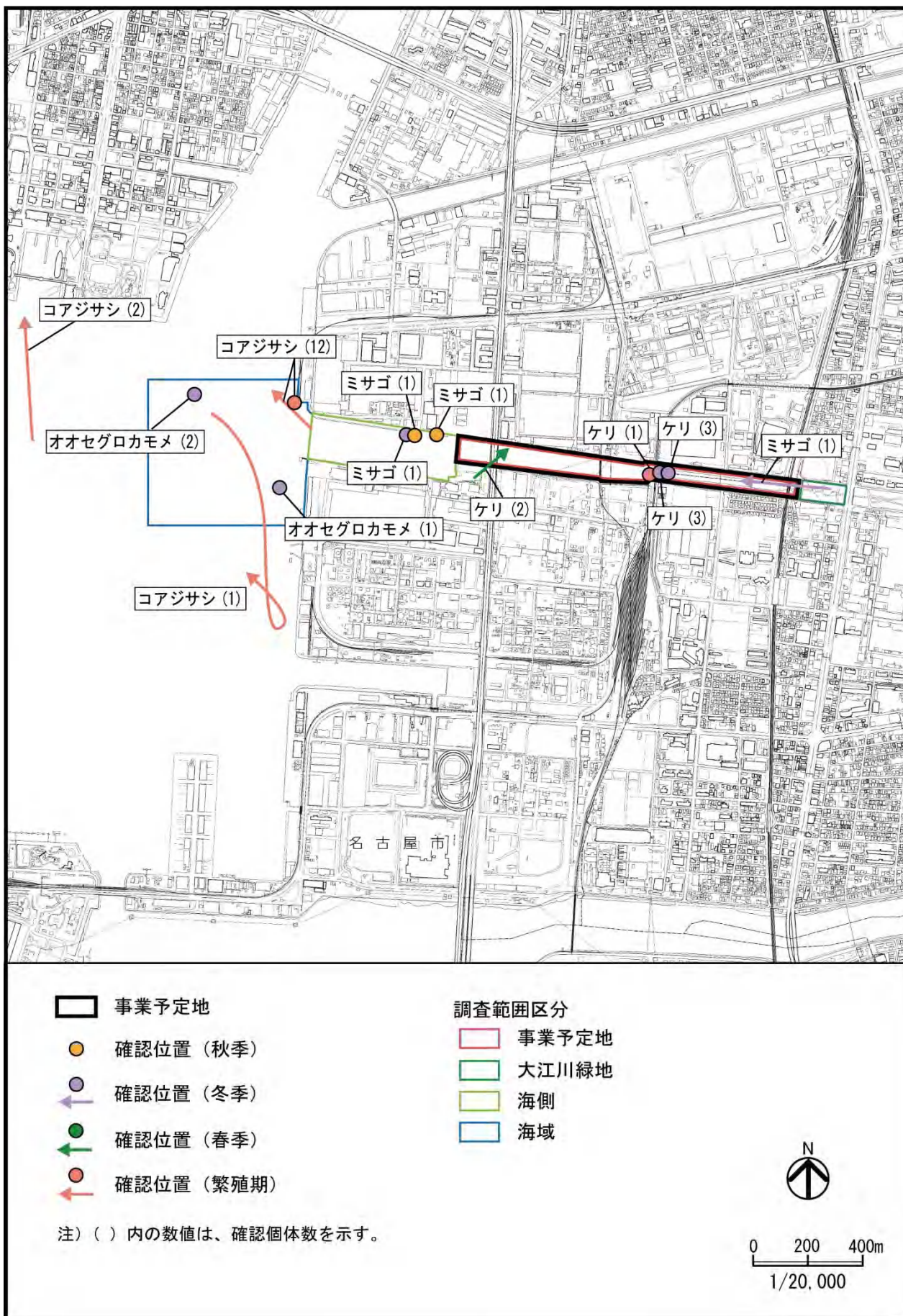


図 2-11-5 重要な種の確認位置 (鳥類)

③ 爬虫類

現地調査で確認された重要な爬虫類は表 2-11-20 に、特徴及び現地確認状況は表 2-11-21 に、確認位置は図 2-11-6 に示すとおりである。

爬虫類の重要な種は、ニホンスッポンの 1 種が確認された。

表 2-11-20 重要な種（爬虫類）

No.	目名	科名	種名	事業 予定地	大江川 緑地	選定基準						
						①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
1	カメ	スッポン	ニホンスッポン	2				DD		DD		DD
計	1 目	1 科	1 種	1 種	0 種	0 種	0 種	1 種	0 種	1 種	0 種	1 種

注)1:種名及び配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(国土交通省, 令和 2 年)に原則従った。

2:選定基準は、表 2-11-17 に対応する。

表 2-11-21 重要な種の特徴及び現地確認状況

種名	ニホンスッポン（カメ目スッポン科）
選定基準と区分	環境省RL：情報不足 愛知県RL：情報不足 名古屋市RL：情報不足
形態	雌雄とも背甲長20～25cm、体重1～2kgであるが、まれに35cmから40cm弱、体重が7kgを超えることがある。背甲は灰褐色で、甲板がない。前趾後肢とも水かきが発達しており、指は5本であるが、爪は3本しかない。首は非常に長い。頭部は細長く、突出した吻端に鼻孔がある。 
分布の概要	本州中央部以西、四国、九州に分布する。愛知県内では広く分布する。ただし北部の山地には分布しない。名古屋市内では、2005年以降の調査で、熱田、北、昭和、千種、天白、中、中村、西、瑞穂、緑、南、守山の各区で確認されている。
生息地の環境／生態的特性	低地から丘陵地にかけての池沼、河川では下流域から中流域の流れが比較的緩やかな水系に棲む。肉食性の強い雑食性で、おもに薄明薄暮に、水底の貝類やエビ類、弱ったり死んだりしている魚類、水生植物などを採餌する。
現在の生息状況／減少の要因	水生植物の群落や砂質の水底といった身を潜める場所が急速に失われており、個体数の減少に拍車をかけている。
現地調査での確認状況	事業予定地で秋季に 2 個体が確認された。

レッドデータブックなごや
2015 動物編より

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」
(名古屋市, 平成 27 年 4 月)

④ 両生類

現地調査で、重要な両生類は確認されなかった。



図 2-11-6 重要な種の確認位置 (爬虫類)

⑤ 昆虫類

現地調査で確認された重要な昆虫類は表 2-11-22 に、特徴及び現地確認状況は表 2-11-23 に、確認位置は図 2-11-7 に示すとおりである。

昆虫類の重要な種は、ヤマトヒメメダカカッコウムシ、キアシハナダカバチモドキの 2 種が確認された。

表 2-11-22 重要な種（昆虫類）

No.	目名	科名	種名	事業 予定地	大江川 緑地	選定基準						
						①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
1	コウチュウ	カッコウムシ	ヤマトヒメメダカ カッコウムシ	1								DD
2	ハチ	ドロバチモドキ	キアシハナダカバ チモドキ	1				VU				
計	2 目	2 科	2 種	1 種	0 種	0 種	0 種	1 種	0 種	0 種	0 種	1 種

注)1:種名及び配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省，令和 2 年）に原則従った。

2:選定基準は、表 2-11-17 に対応する。

表 2-11-23(1) 重要な種の特徴及び現地確認状況

種名	ヤマトヒメメダカカッコウムシ (コウチュウ目カッコウムシ科)
選定基準と区分	名古屋市RL：情報不足
形態	体長5.5mm内外。頭部は横皺と点刻を密に具える。触角第9節はやや幅広く、第10節と球悍をつくる。前胸背板は滑らかな正中部を除き、不規則に皺状に点刻され、側瘤の上に斜めの窪みがある。上翅の斑紋には変化があり、前胸の黒いものもある。  本事業での撮影写真
分布の概要	本州に分布する。名古屋市内では中川区庄内川、守山区で確認されている。
生息地の環境／生態的特性	河川敷や河口部、沼地などの芦原に生息している。
現在の生息状況／減少の要因	河川やため池の改修による整備が進み、本種の生息地も減少している。
現地調査での確認状況	事業予定地で秋季に1個体が確認された。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」
(名古屋市,平成 27 年 4 月)

表 2-11-23(2) 重要な種の特徴及び現地確認状況

種名	キアシハナダカバチモドキ (ハチ目ドロバチモドキ科)
選定基準と区分	環境省RL：絶滅危惧Ⅱ類
形態	体長約23mm。体は黒色。腹部各節側部に黄白色の斑紋があり、腿節、脛節、跗節は赤褐色。  本事業での撮影写真
分布の概要	本州、四国、九州に分布する。
生息地の環境／生態的特性	砂浜海岸、砂質の河川敷に生息する。幼虫の餌としてバッタ、ササキリ等のバッタ目の成虫を狩る。
現在の生息状況／減少の要因	本種の生息地である海岸の防風林が、近年はコンクリート製の防波壁が作られたり、防風林に除草や除草剤散布が行われるなどして砂地環境が悪化し、また河川敷開発により、本種の存続が脅かされている。
現地調査での確認状況	事業予定地で夏季に1個体が確認された。

出典)「レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 5 昆虫類」
(環境省,平成 27 年 2 月)

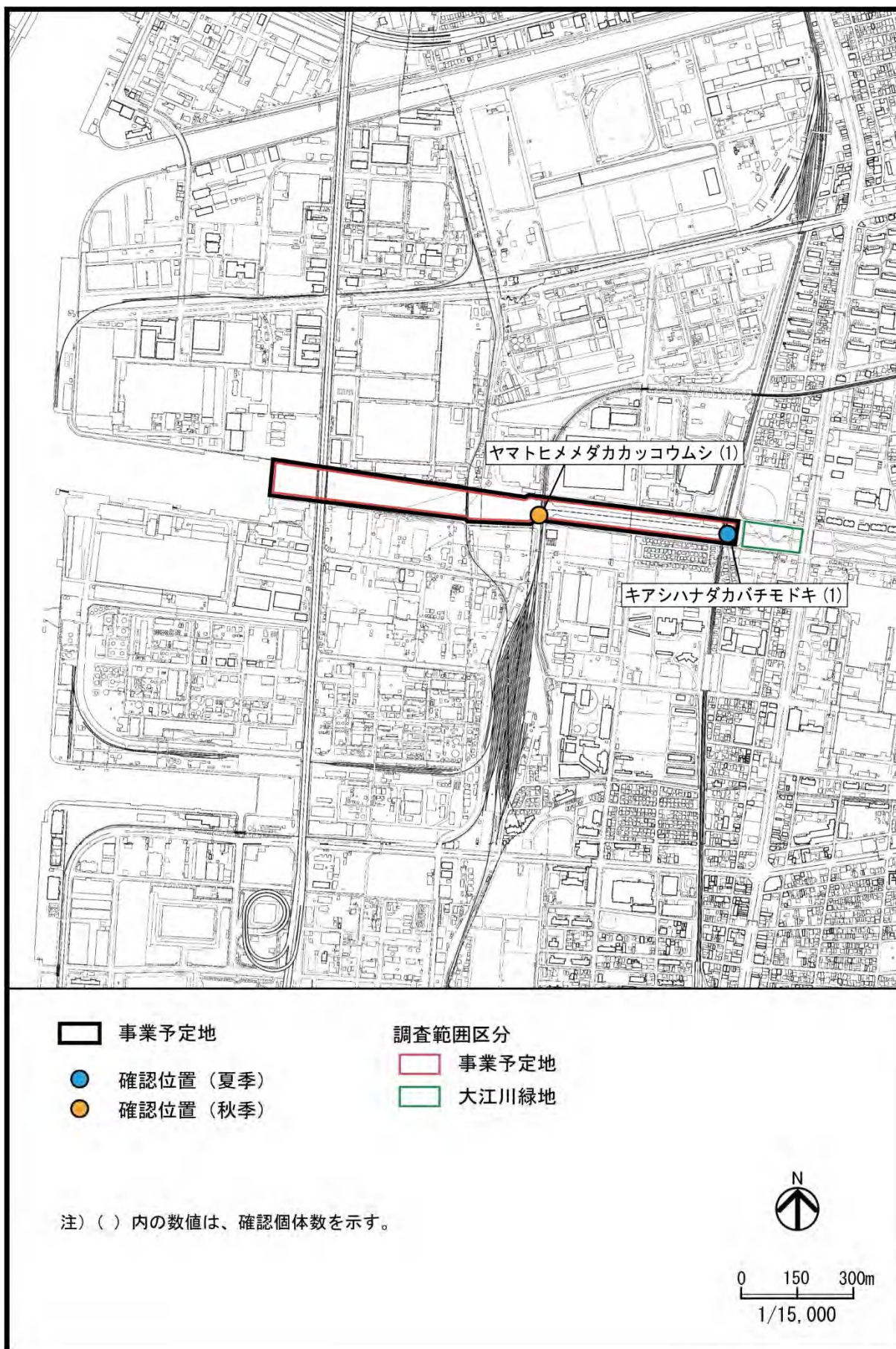


図 2-11-7 重要な種の確認位置 (昆虫類)

(b) 水生動物

① 動物プランクトン

現地調査で、重要な動物プランクトンは確認されなかった。

② 底生生物

現地調査で確認された重要な底生生物は表 2-11-24 に、特徴及び現地確認状況は表 2-11-25 に、確認位置は図 2-11-8 に示すとおりである。

底生動物の重要な種は、カワグチツボ、ウミゴマツボ（別名エドガワミズゴマツボ）の 2 種が確認された。

表 2-11-24 重要な種（底生生物）

No.	目名	科名	種名	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	選定基準						
								①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
1	新生腹足	ワカウラツボ	カワグチツボ		10					NT		NT		NT
2		ミズゴマツボ	ウミゴマツボ		10					NT		NT		NT
計	1 目	2 科	2 種	0 種	2 種	0 種	0 種	0 種	0 種	2 種	0 種	2 種	0 種	2 種

注) 1: 種名及び配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省，令和 2 年）に原則従った。

2: 選定基準は、表 2-11-17 に対応する。

表 2-11-25(1) 重要な種の特徴及び現地確認状況

種名	カワグチツボ（新生腹足目ワカウラツボ科）
選定基準と区分	環境省RL：準絶滅危惧 愛知県RL：準絶滅危惧 名古屋市RL：準絶滅危惧
形態	殻は殻長約5mm と小型で、長卵形。臍孔は狭いが開く、蓋は革質で薄い。近似種のワカウラツボとは臍孔が開く点、殻が薄い点などで区別される。 
分布の概要	北海道北部（クッチャロ湖）～九州に分布する。愛知県内の生息場所は著しく減少したと考えられ、7ヶ所程度である。生息地では群生して多産する。名古屋市内では藤前干潟の干潟上部の泥表面に比較的多数生息しているが、生息範囲は狭い。
生息地の環境／生態的特性	内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息する。藤前干潟ではエドガワミズゴマツボと同所的に生息している。
現在の生息状況／減少の要因	ヨシ原湿地や内湾奥の泥干潟が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。
現地調査での確認状況	No. 2 で夏季に 10 個体が確認された。

出典) 「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」
(名古屋市，平成 27 年 4 月)

表 2-11-25 (2) 重要な種の特徴及び現地確認状況

種名	ウミゴマツボ（新生腹足目ミズゴマツボ科） 別名エドガワミズゴマツボ
選定基準と区分	環境省RL：準絶滅危惧 愛知県RL：準絶滅危惧 名古屋市RL：準絶滅危惧
形態	殻は殻長約2mmと微小で、卵形。殻口は体層から狭まり円形。臍孔はない。 
分布の概要	宮城県万石浦・若狭湾～九州に分布する。愛知県内の生息場所は著しく減少したと考えられ、現在8ヶ所である。生息地では群生し、個体数は多い。名古屋市内では藤前干潟の干潟上部の泥表面に比較的多数生息しているが、生息範囲は狭い。
生息地の環境／生態的特性	内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息する。
現在の生息状況／減少の要因	ヨシ原湿地や内湾奥の泥干潟が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。
現地調査での確認状況	No.2 で冬季に10個体が確認された。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや2015 動物編」
(名古屋市, 平成27年4月)

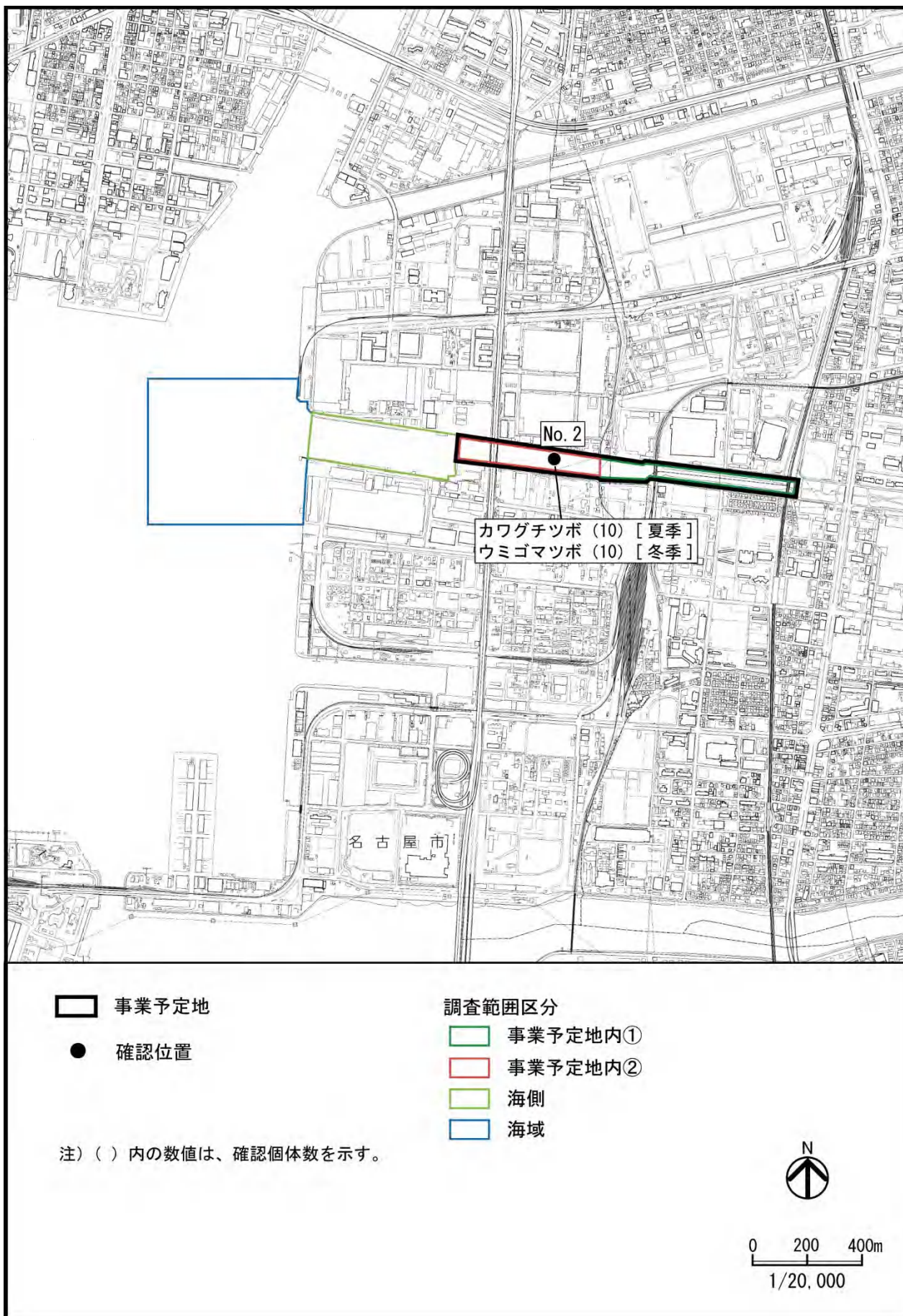


図 2-11-8 重要な種の確認状況（底生生物）

③ 魚卵・稚仔魚

現地調査で、重要な魚卵・稚仔魚は確認されなかった。

④ 魚介類

現地調査で確認された重要な魚介類は表 2-11-26 に、特徴及び現地確認状況は表 2-11-27 に、確認位置は図 2-11-9 に示すとおりである。

魚介類の重要な種は、ニホンウナギ、トビハゼ、マサゴハゼ、クシテガニ、モクズガニ、コメツキガニの 6 種が確認された。

表 2-11-26 重要な種（魚介類）

No.	目名	科名	種名	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	選定基準						
								①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
1	ウナギ	ウナギ	ニホンウナギ		1					EN		EN		EN
2	スズキ	ハゼ	トビハゼ	5	2					NT		VU		EN
3			マサゴハゼ	5	8	1				VU		VU		EN
4	エビ	ベンケイガニ	クシテガニ	4	1						NT			VU
5		モクズガニ	モクズガニ	1		2								NT
6		コメツキガニ	コメツキガニ	1										NT
計	3 目	5 科	6 種	5 種	4 種	2 種	0 種	0 種	0 種	3 種	1 種	3 種	0 種	6 種

注)1:種名及び配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(国土交通省, 令和 2 年)に原則従った。

2:選定基準は、表 2-11-17 に対応する。

表 2-11-27(1) 重要な種の特徴及び現地確認状況

種名	ニホンウナギ（ウナギ目ウナギ科）
選定基準と区分	環境省RL：絶滅危惧IB類 愛知県RL：絶滅危惧IB類 名古屋市RL：絶滅危惧IB類
形態	体長1m。成魚の背中側は黒く、腹側は白や黄色。レプトケファルス幼生（海を浮遊移動しやすい扁平な葉状形）期を経て変態し、円筒形の稚魚シラスウナギ（無色透明、体長5cm程度）となる。 
分布の概要	北海道～琉球列島に分布する。愛知県内では矢作川水系に多い。名古屋市内では庄内川水系及び天白川水系に分布する。
生息地の環境／生態的特性	成魚は河川中・下流、河口のほか溜め池、海（内湾）にも生息する。降海した成魚はマリアナ諸島沖で産卵、2～3日で孵化し、幼生は河口に到達後、遡河して小動物を捕食して成長し、5～10数年ほどで成熟する。
現在の生息状況／減少の要因	名古屋市内の河川における個体数密度は市外の河川の平均値のおよそ半分程度である。仔魚は海からなんとか遡上するものの、河川工事によって餌となる小魚やエビ類、隠れ場となる土砂や石の隙間などが減っている。幼魚は下流部の砂地で、成魚は河川内構造物の隙間や水際植物の影に潜むが、これらの環境が著しく損なわれている。
現地調査での確認状況	No.2で春季に1個体（稚魚シラスウナギ）が確認された。

出典）「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」（名古屋市，平成 27 年 4 月）

表 2-11-27(2) 重要な種の特徴及び現地確認状況

種名	トビハゼ（スズキ目ハゼ科）
選定基準と区分	環境省RL：準絶滅危惧 愛知県RL：絶滅危惧Ⅱ類 名古屋市RL：絶滅危惧IB類
形態	体長約8cm。頭と体は円筒形で、後方はやや側扁する。眼は上方に突出し、両眼の間隔は狭い。第1背鰭は丸い。腹鰭は吸盤状で、後縁はくぼむ。胸鰭基部の筋肉は発達し、これを腕のように使って泥干潟上を這い回る。体側に小さな黒色点が散在する。 
分布の概要	東京湾から沖縄島に分布する。愛知県内では伊勢湾、三河湾の河口干潟に分布する。名古屋市内では庄内川河口、藤前干潟に分布する。
生息地の環境／生態的特性	内湾の湾奥や河川の河口域の泥底が発達した干潟に生息する。日中の干出時に泥干潟上で活動し、索餌や求愛行動を行う。陸上では主に皮膚を用いて空気呼吸を行う。産卵期は6～8月。雄は泥中に産卵巣をつくり、求愛ジャンプで雌を呼ぶ。11～3月には終日、泥底に掘った巣穴で過ごし、餌も食べない
現在の生息状況／減少の要因	市内における分布は局地的である。コンクリート護岸化に伴う岸辺の転石帯や植物帯の消失は生息・休息場所の減少の要因となっている。
現地調査での確認状況	No.1で夏季に4個体、秋季に1個体、No.2で夏季に2個体が確認された。

出典）「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」（名古屋市，平成 27 年 4 月）

表 2-11-27(3) 重要な種の特徴及び現地確認状況

種名	マサゴハゼ（スズキ目ハゼ科）
選定基準と区分	環境省RL：絶滅危惧Ⅱ類 愛知県RL：絶滅危惧Ⅱ類 名古屋市RL：絶滅危惧IB類
形態	体長3cm。体は細長く、体高は低い。吻端は丸く突出し、上唇をわずかに被う。尾鰭後縁は丸い。尾鰭基部にくさび形の黒色斑がある。 
分布の概要	宮城県から沖縄島に分布する。愛知県内では伊勢湾、三河湾の河口干潟、前浜干潟に分布する。名古屋市内では日光川、庄内川の河口干潟に分布する。
生息地の環境／生態的特性	河口干潟や塩水湿地の軟泥底や砂泥底に生息する。名古屋市内でも泥質の河口干潟、それに連なる前浜干潟を流れる水路や浅い水たまりで採集されている。産卵期は九州西岸で5～6月、三重県揖斐川で6～8月と考えられている。産卵はアナジャコなどの小型甲殻類の生息孔内で行う。7～9月には成魚が生息する河口汽水域で着底した稚魚がみられる。
現在の生息状況／減少の要因	名古屋市内における分布は局地的である。干潟の埋め立てや護岸工事、河川改修、土砂流入、水質汚染、底質汚濁などにより生息地が減少している。
現地調査での確認状況	No.1で秋季に3個体、冬季に1個体、春季に1個体、No.2で夏季に1個体、秋季に4個体、冬季に3個体、No.3で春季に1個体が確認された。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」
(名古屋市, 平成 27 年 4 月)

表 2-11-27(4) 重要な種の特徴及び現地確認状況

種名	クシテガニ（エビ目ベンケイガニ科）
選定基準と区分	環境省海洋生物RL：準絶滅危惧 名古屋市RL：絶滅危惧Ⅱ類
形態	雄の甲長21mm位、甲幅30mm位で四角形のカニ。鋏脚の可動指の上縁に米粒のような顆粒が6～8個並びクシのように見える。 
分布の概要	東京湾、相模湾、岡山、熊本、長崎方面に分布する。愛知県内では知多市鍛冶屋川河口、田原市汐川河口で確認されている。名古屋市内では庄内川河口左岸に残された干潟・ヨシ原と右岸の背割堤に生息している。
生息地の環境／生態的特性	汽水域上限まで見られ、ヨシ原の中で生息する。干潟の高い場所や川堤に穴居する。
現在の生息状況／減少の要因	護岸工事など開発が進み干潟・ヨシ原が減少したため、個体数が減少した。
現地調査での確認状況	No.1で春季に4個体、No.2で春季に1個体が確認された。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」
(名古屋市, 平成 27 年 4 月)

表 2-11-27(5) 重要な種の特徴及び現地確認状況

種名	モクズガニ（エビ目モクズガニ科）
選定基準と区分	名古屋市RL：準絶滅危惧
形態	雄の甲長50mm位、甲幅80mm位に達する淡水最大のカニ。鋏脚掌部の外面は軟毛でおおわれ、雄は雌より著しい。甲の側縁に3歯がある。 
分布の概要	北海道以南、本州、四国、九州、沖縄まで分布する。愛知県内では知多半島の各河川や三河湾に流れ込む矢作川・豊川などの上流まで分布している。名古屋市内では庄内川のかなり上流と矢田川など支流に多く分布している。天白川では減少傾向にある。
生息地の環境／生態的特性	成体は各地の河川に生息する。年間を通し放卵するが、抱卵盛期は9月から翌年6月、特に9月から10月は、海（河口）に降り放卵する数が多い。
現在の生息状況／減少の要因	水質汚濁に強いが、水質の富栄養化が進むと生息困難となる。河口の干潟・ヨシ原の環境が悪化すると個体数が減少する。
現地調査での確認状況	No.1で秋季に1個体、No.3で秋季に2個体が確認された。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」
(名古屋市, 平成 27 年 4 月)

表 2-11-27(6) 重要な種の特徴及び現地確認状況

種名	コメツキガニ（エビ目コメツキガニ科）
選定基準と区分	名古屋市RL：準絶滅危惧
形態	雄は甲長7mm位、甲幅9mm位の小型のカニ。鋏脚は左右同じ大きさ。指部は内側に曲がりスプーン状である。 
分布の概要	北海道から九州、沖縄、八重山まで分布する。愛知県内では知多半島伊勢湾側内海の干潟に分布する。三河湾に流れこむ河川、矢作川、豊川、汐川などの河口干潟、一色海岸の干潟にも分布する。名古屋市内では庄内川河口砂底干潟に多く分布している。天白川の河口干潟は、河口の自然環境が悪くカニの個体数が減少している。
生息地の環境／生態的特性	内湾や河口の砂底干潟に群生する。干潮時に摂食活動が見られる。干潟の表面に繁殖するケイ藻類を砂土とともに鋏脚ですくって口に入れ、砂土を団子にして外に捨てる。抱卵盛期は6～7月。
現在の生息状況／減少の要因	天白川河口干潟は砂底干潟やヨシ原が減少し、コメツキガニは激減した。
現地調査での確認状況	No.1で冬季に1個体が確認された。

出典)「名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編」
(名古屋市, 平成 27 年 4 月)

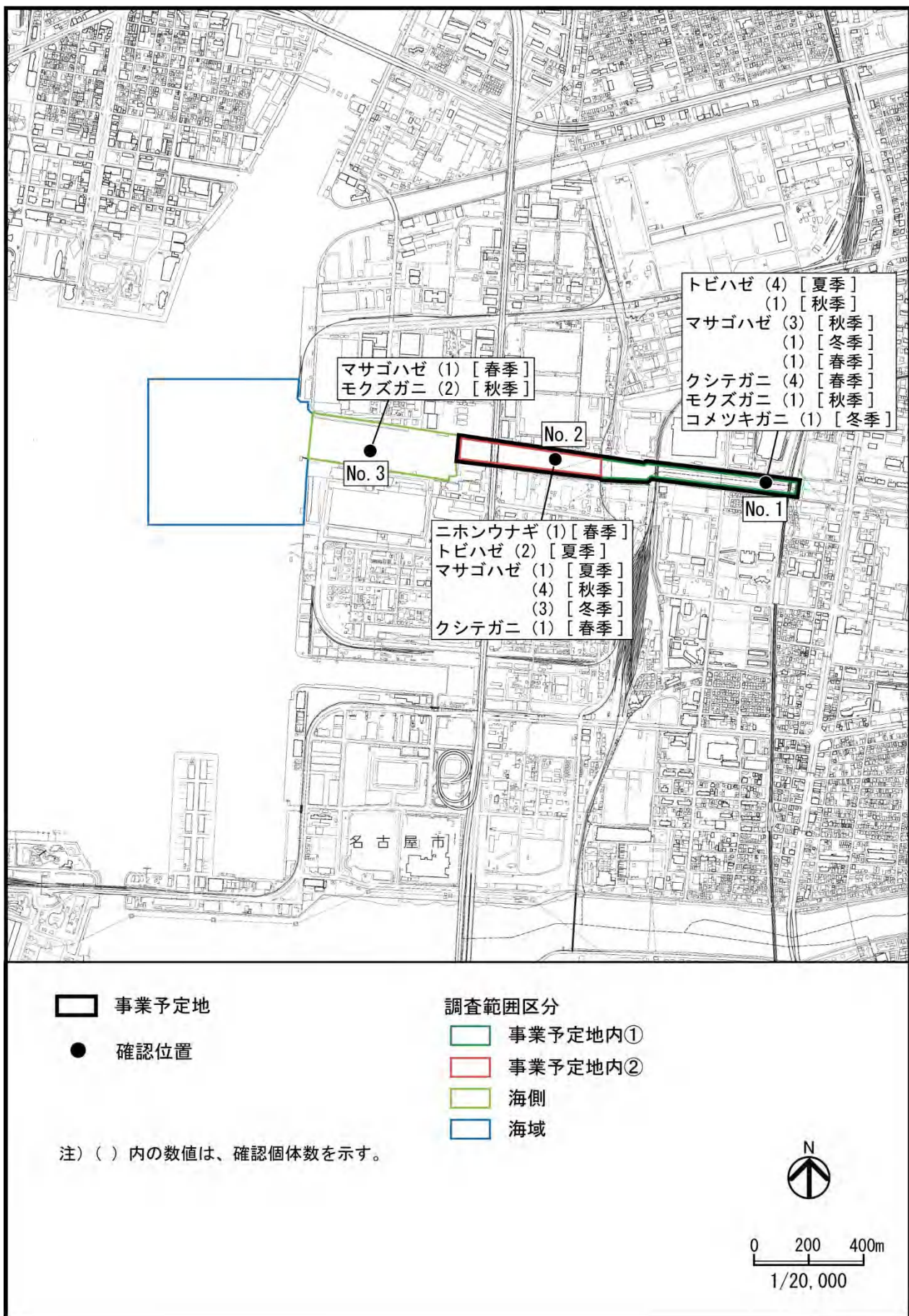


図 2-11-9 重要な種の確認位置（魚介類）

⑤ 付着生物（動物）

現地調査で、重要な付着生物（動物）は確認されなかった。

ウ まとめ

現地調査においては、哺乳類が 1 種、鳥類が 60 種、爬虫類が 3 種、昆虫類が 342 種、動物プランクトンが 43 種、底生生物が 26 種、魚卵が 8 種、稚仔魚が 5 種、魚介類が 32 種、付着生物（動物）が 27 種確認された。

重要な種は、鳥類で 4 種（ケリ、オオセグロカモメ、コアジサシ、ミサゴ）、爬虫類で 1 種（ニホンスッポン）、昆虫類で 2 種（ヤマトヒメメダカカッコウムシ、キアシハナダカバチモドキ）、底生生物で 2 種（カワグチツボ、ウミゴマツボ）、魚介類で 6 種（ニホンウナギ、トビハゼ、マサゴハゼ、クシテガニ、モクズガニ、コメツキガニ）が確認された。

水鳥の重要な餌場等の注目すべき生息地は確認されなかった。

(3) 予 測

ア 予測事項

水面の埋立てによる陸生動物及び水生動物への影響とし、具体的には以下に示す項目について検討を行った。

- ・ 重要な陸生動物種及び注目すべき生息地への影響
- ・ 重要な水生動物種及び注目すべき生息地への影響

イ 予測対象時期

工事期間中

ウ 予測場所

事業予定地及び事業予定地周辺

エ 予測方法

埋立ての工事計画と、重要な陸生動物種、重要な水生動物種及び注目すべき生息地との位置関係を把握した。そして、重要な種及び注目すべき生息地の消失の程度、埋立て等に伴う影響等について、現地確認内容や一般的な生態、既存の科学的知見等から、その影響の程度を定性的に予測した。

オ 予測条件

予測条件は、第 10 章「植物」10-1「工事中」と同じとした。(第 10 章 10-1 (3) オ「予測条件」(p.348) 参照)

カ 予測結果

(7) 重要な陸生動物種及び注目すべき生息地への影響

a ケリ（鳥類）

本種は、主に草地に生息・繁殖し、昆虫類、ミミズ、カエル等を捕食する。

現地調査では、事業予定地で冬季に 6 例、春季に 2 例、繁殖期に 1 例の飛翔が確認された。

本種は、繁殖行動が確認されず、営巣適地も近くに分布しないと考えられるため、事業予定地及び事業予定地周辺では繁殖していないと考えられる。また、採餌・採餌行動も確認されなかったことから、事業予定地及び事業予定地周辺は、餌場としての利用頻度も低く、飛翔通過が大半であるものと考えられる。

事業による影響は小さいものと予測される。

b オオセグロカモメ（鳥類）

本種は、海岸、海上に生息し、海岸の崖、岩礁、時に建物で繁殖し、主に魚類、動物の死体を食べる。

現地調査では、事業予定地より西側の海域で、冬季に3例の飛翔が確認された。

本種は冬鳥であることから、事業予定地及び事業予定地周辺では繁殖していない。また、採餌・採餌行動も確認されなかったことから、事業予定地及び事業予定地周辺は、餌場としての利用頻度も低く、飛翔通過が大半であるものと考えられる。

事業による影響は小さいものと予測される。

c コアジサシ（鳥類）

本種は、南方から渡来し、海岸や河川、池沼等で小魚を捕食して生活する。

現地調査では、事業予定地より西側の海域で、繁殖期に15例の飛翔や休息が確認された。

繁殖行動は確認されず、営巣適地も近くに分布しないと考えられるため、事業予定地及び事業予定地周辺では繁殖していないと考えられる。また、採餌・採餌行動も確認されなかったことから、事業予定地及び事業予定地周辺は、餌場としての利用頻度も低く、飛翔通過が大半であるものと考えられる。

事業による影響は小さいものと予測される。

d ミサゴ（鳥類）

本種は、魚食性で沿岸域や大きな河川を採餌場としており、海岸の断崖や岩場、水辺の大木などに営巣する。

現地調査では、事業予定地上空で冬季に1例の飛翔、事業予定地より海側の大江川で秋季に2例のとまり、冬季に1例の採餌が確認された。

繁殖行動は確認されず、営巣適地も近くに分布しないと考えられるため、事業予定地及び事業予定地周辺では繁殖していないと考えられる。その一方、事業予定地より海側で採餌行動が確認されたため、事業予定地及びその周辺は、餌場の一部として利用している。しかし、採餌行動は河川幅が相対的に狭い事業予定地では確認されなかったこと、確認された海側の水域は埋め立てないこと、本種は行動圏が広い猛禽類であることから、事業による影響は小さいものと予測される。

e ニホンスッポン（爬虫類）

本種は、低地から丘陵地にかけての池沼、河川では下流域から中流域の流れが比較的緩やかな水系に棲む。事業予定地周辺の南区等に生息している情報がある。

現地調査では、事業予定地内で2個体が確認された。

本種は水辺植生や砂底等といった身をひそめる場所が重要であり、水面の埋立てにより本種の確認地点は消失し生息環境も変化するが、大江川の河川連続性は確保される。本種は移動能力があり、多様な水環境にも生息できるため、工事中は事業予定地の上下流へ移動するものと考えられる。事業による影響は小さいものと予測される。

f ヤマトヒメメダカカッコウムシ（昆虫類）

本種は、河川敷や河口部、沼地などの芦原に生息している。事業予定地周辺の庄内川等で生息している情報がある。

現地調査では、事業予定地内で1個体が確認された。

本種は主にヨシ原に依存する種であり、水面の埋立てにより本種の確認地点及び生息環境が消失するため、事業による影響はあると予測される。しかしながら、本種は周辺に生息情報があり、大江川での確認個体数も多くないと考えられることから、名古屋港湾における地域個体群に及ぼす影響は小さいものと予測される。

g キアシハナダカバチモドキ（昆虫類）

本種は、砂浜海岸、砂質の河川敷に生息する。市内の生息状況は不明である。

現地調査では、事業予定地内で1個体が確認された。

本種は主に砂草地に生息する種であり、水面の埋立てにより本種の確認地点及び生息環境が消失するため、事業による影響はあると予測される。しかしながら、本種は飛翔能力の高いハチ類であり、生息環境となる砂質の河川敷は天白川河口にもみられること、大江川での確認個体数も多くないと考えられることから、名古屋港湾における地域個体群に及ぼす影響は小さいものと予測される。

h 注目すべき生息地への影響

事業予定地及び事業予定地周辺に注目すべき生息地は確認されなかったことから、水面の埋立てによる影響はないものと予測される。

(イ) 重要な水生動物種及び注目すべき生息地への影響

a カワグチツボ（底生生物）

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息する。事業予定地周辺の藤前干潟に健全な個体群が残っている情報がある。

現地調査では、事業予定地内で10個体が確認された。

本種は移動能力が低く、水面の埋立てにより本種の確認地点及び生息環境が消失するため、事業による影響はありと予測される。しかしながら、本種は周辺に生息情報があり、大江川での確認個体数も多くないと考えられることから、名古屋港湾における地域個体群に及ぼす影響は小さいものと予測される。

b ウミゴマツボ（底生生物）

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息する。事業予定地周辺の藤前干潟に健全な個体群が残っている情報がある。

現地調査では、事業予定地内で10個体が確認された。

本種は移動能力が低く、水面の埋立てにより本種の確認地点及び生息環境が消失するため、事業による影響はありと予測される。しかしながら、本種は周辺に生息情報があり、大江川での確認個体数も多くないと考えられることから、名古屋港湾における地域個体群に及ぼす影響は小さいものと予測される。

c ニホンウナギ（魚介類）

本種は、河川中・下流、河口のほか溜め池、海（内湾）にも生息する。事業予定地周辺の庄内川水系及び天白川水系に生息している情報がある。

現地調査では、事業予定地内で1個体が確認された。

水面の埋立てにより、本種の確認地点は消失し生息環境も変化するが、大江川の河川連続性は確保される。本種は移動能力が高く、多様な水環境にも生息できるため、工事中は事業予定地の上下流へ移動するものと考えられる。事業による影響は小さいものと予測される。

d トビハゼ（魚介類）

本種は、内湾の湾奥や河川の河口域の泥底が発達した干潟に生息する。事業予定地周辺の天白川河口部や庄内川河口部及び藤前干潟に生息している情報がある。

現地調査では、事業予定地内で夏季に6個体、秋季に1個体が確認された。

本種は干出する泥干潟に依存する種で、水面の埋立てにより本種の確認地点及び生息環境が消失するため、事業による影響はありと予測される。しかしながら、本種は周辺に生息情報があり、大江川での確認個体数も多くないと考えられることから、名古屋港湾における地域個体群に及ぼす影響は小さいものと予測される。

e マサゴハゼ（魚介類）

本種は、河口干潟や塩水湿地の軟泥底や砂泥底に生息する。事業予定地周辺の日光川、庄内川の河口干潟に生息している情報がある。

現地調査では、事業予定地内で夏季に 1 個体、秋季に 7 個体、冬季に 4 個体、春季に 1 個体、事業予定地より海側で春季に 1 個体が確認された。

本種は主に汽水域の泥底に依存する種で、水面の埋立てにより本種の多くの確認地点及び生息環境が消失するが、生息が確認された事業予定地の海側の水域は埋め立てられない。大江川における個体群は維持されることが考えられることから、事業による影響は小さいものと予測される。

f クシテガニ（魚介類）

本種は、汽水域上限まで見られ、ヨシ原の中で生息する。事業予定地周辺の庄内川河口左岸に残された干潟・ヨシ原と右岸の背割堤に生息している情報がある。

現地調査では、事業予定地内で春季に 5 個体が確認された。

本種は主にヨシ原に依存する種で、水面の埋立てにより本種の確認地点及び生息環境が消失するため、事業による影響はあったと予測される。しかしながら、本種は周辺に生息情報があり、大江川での確認個体数も多くないと考えられることから、名古屋港湾における地域個体群に及ぼす影響は小さいものと予測される。

g モクズガニ（魚介類）

本種は、産卵のために海（河口）に降りるが、生活史の大部分を淡水域で生息する。庄内川と矢田川など支流に多く生息しているほか、天白川でも生息情報がある。

現地調査では、事業予定地内で秋季に 1 個体、事業予定地より海側で秋季に 2 個体が確認された。

水面の埋立てにより、本種の確認地点の 1 箇所は消失し生息環境も変化するが、大江川の河川連続性は確保される。本種は移動能力があり、多様な水環境にも生息できるため、工事中は事業予定地の上下流へ移動するものと考えられる。事業による影響は小さいものと予測される。

h コメツキガニ（魚介類）

本種は、内湾や河口の砂底干潟に群生する。庄内川河口の砂底干潟に多く分布している情報がある。

現地調査では、事業予定地内で冬季に 1 個体が確認された。

本種は砂底干潟に依存する種で、水面の埋立てにより本種の確認地点及び生息環境が消失するため、事業による影響はあったと予測される。しかしながら、本種は周辺に生息情報があり、大江川での確認個体数も多くないと考えられることから、名古屋港湾における地域個体群に及ぼす影響は小さいものと予測される。

i 注目すべき生息地への影響

事業予定地及び事業予定地周辺に注目すべき生息地は確認されなかったことから、水面の埋立てによる影響はないものと予測される。

じ その他

スナメリは、既存資料による調査において名古屋港内の広い範囲で確認されていることから、事業予定地前面海域を利用している可能性がある。しかし、現地調査では確認されず、この海域の利用頻度は高くないと考えられるため、水面の埋立てによる影響は小さいものと予測される。

(4) 環境の保全のための措置

本事業の実施にあたっては、以下に示す環境の保全のための措置を講ずる。

- ・ 工事時の大気汚染、粉じん、騒音、振動、濁水等による重要な動物種の生息環境（施工区域下流側の感潮域も含む）への影響の防止に留意した工事計画を策定する。
- ・ 工事に先立ち、施工区域の境界に汚濁防止膜を設置することにより、濁りの拡散を抑制する。
- ・ 排水の発生の低減に努めるとともに、発生した排水は適切に水質処理を行った後、放流する。
- ・ 水生動物の生息域を少しでも消失させないように、専門家と相談し、重要な水生動物種の移動能力を踏まえ、水面の埋立てによる影響を可能な限り軽減するための工事計画を検討し、実施する。
- ・ 工事中、施工区域内でスナメリが確認された場合は、区域外に出るまで監視を続けるなど、工事による影響を軽減するための措置を講じる。
- ・ 水面の埋立てによる影響を可能な限り軽減するため、工事計画を検討し実施する。
- ・ 工事の実施にあたっては、施工業者間で連絡調整を行うとともに、情報共有を緊密に行えるような体制づくりに努める。

(5) 評価

予測結果によると、工事による水面の埋立てにより動物の生息環境が消失するため事業による影響はあるが、周辺に生息情報があることから、水面の埋立てによる動物への影響は小さいと判断する。

11-2 存在時

(1) 概 要

埋立地の存在による水生動物への影響について検討を行った。

(2) 調 査

既存資料及び現地調査については、11-1「工事中」に示すとおりである。(11-1 (2)「調査」(p. 353) 参照)

(3) 予 測

ア 予測事項

埋立地の存在による水生動物への影響とし、具体的には以下に示す項目について検討を行った。

- ・ 重要な水生動物種への影響
- ・ 注目すべき生息地への影響

イ 予測対象時期

埋立地の存在時

ウ 予測場所

事業予定地周辺

エ 予測方法

事業計画、埋立地及び防潮壁の存在による影響等について、重要な水生動物種の現地確認内容や一般的な生態、水質・底質及び流況の予測結果、既存の科学的知見等から、その影響の程度を定性的に予測した。

オ 予測条件

予測条件は、第 10 章「植物」10-2「存在時」と同じとした。(第 10 章 10-2 (3) オ「予測条件」(p. 351) 参照)

カ 予測結果

(ア) 重要な水生動物種への影響

α カワグチツボ（底生生物）、ウミゴマツボ（底生生物）、トビハゼ（魚介類）、クシテガニ（魚介類）、コメツキガニ（魚介類）

カワグチツボ及びウミゴマツボは汽水域に生息する種で、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息する。トビハゼは汽水域の干出する泥干潟に依存する種、クシテガニは主に汽水域のヨシ原に依存する種、コメツキガニは汽水域の砂底干潟や海浜に依存する種である。

存在時の大江川は暗渠の区間が長くなり、開放水面である事業予定地より海側の水域

は、基本的に干満差がなくなり淡水化する。この海側の水域は、淡水化に伴いヨシ群落が成立することも考えられるが汽水域ではなくなるため、これらの種の生息環境は消失する。しかしながら、これらの種は周辺に生息情報があり、大江川での確認個体数も多くないと考えられることから、名古屋港湾における地域個体群に及ぼす影響は小さいものと予測される。

b ニホンウナギ（魚介類）、モクズガニ（魚介類）

ニホンウナギは、河川中・下流、河口のほか溜め池、海（内湾）にも生息する移動能力の高い種である。

モクズガニは、産卵のために海（河口）に降りるが、生活史の大部分を淡水域で生息する。

存在時の大江川は、大江川緑地と同様に事業予定地も地中（暗渠）を流下し、事業予定地より海側の開放水面で淡水を貯留する形となり、その水位が海面より高くなった段階で名古屋港へ注ぎこむ計画である。

ニホンウナギは移動能力が高く、モクズガニは移動能力があり、両種とも多様な水環境にも生息できるため、大江川の連続した水域で生息を続けるほか、周辺河川へ移動するものと考えられる。事業による影響は小さいものと予測される。

c マサゴハゼ（魚介類）

本種は、河口干潟や塩水湿地の軟泥底や砂泥底に生息する種で、事業予定地より海側の水域でも生息が確認されている。

この水域は存在時になると干満差がなくなり淡水化するため、生息環境が消失すると予測される。しかしながら、本種は周辺に生息情報があり、大江川での確認個体数も多くないと考えられることから、名古屋市河口部における地域個体群に及ぼす影響は小さいものと予測される。

(イ) 注目すべき生息地への影響

事業予定地内に注目すべき生息地は確認されなかったことから、埋立地の存在による影響はないものと予測される。

(4) 評価

予測結果によると、工事による水面の埋立てにより水生動物の生息環境は消失するが、重要な水生動物種に及ぼす影響は小さく、事業予定地内に注目すべき生息地は確認されなかったことから、埋立地の存在による動物への影響は小さいと判断する。